

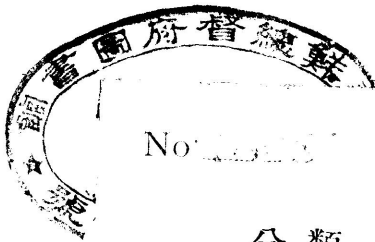
大正二年十月

朝

# 牧牛指南

附豚、鷄、羊

朝鮮總督府



No. ....

分類

No. ....

ほんをひらく  
ときはつばを  
ゆびさきに  
つけないやう



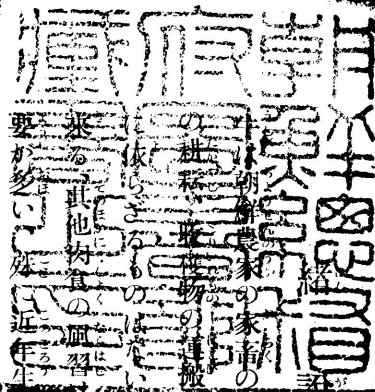
# 牧牛指南

## 目次

緒説	一
牛の選擇	四
用途と體格	五
年齢の判斷	一一
種牛の選擇	一五
繁殖の期間	一五
發情と種付	一七
妊娠と妊娠中の注意	一九
分娩と分娩後の注意	二一
飼料の種類	二五
飼料と飲水の與給	二九

放牧と繫牧	三二
犢、種牛、役牛の飼養法	三四
肥育法	三八
取扱と運動	四二
牛舎と手入	四三
装蹄と鼻環	四六
去勢の效用	四七
病傷の注意	四八
牛皮の改良	六一
附記	
朝鮮總督府訓令	六四
附録	
豚	一
鶏	二四
羊	四三

# 牧羊指南



朝鮮の農家の家畜の中で最も効用の著しいものである、即ち田畜の糞、牛糞物の調製など、農業の勞力の多くは牛の力に依らざるものはない、厩肥も亦牛ありて始めて生産することが出来る、其他肉用の風習は都鄙を通じて盛んに行はれるから、牛肉の需要が乏しい、近年生牛、牛皮、牛骨等は内地や外國に移輸出されて重要な産物となつておる、

右の如く牛の効用は甚だ廣くして、朝鮮の經濟上大なる關係を有つておるから、益々之れを増殖すると共に、その改良は實に今日の急

務である。

牛を改良するには、第一に従來の繁殖法を改めることが肝要である。即ち優れたる種牛を選びて繁殖を言るのである、學問上からは類は類を生ずといふ原則に基くものであるが、平易く言へば良牛は良牛を生むといふことになる、以上の如く種牛の選擇は大切であるにも拘はらず、現在では之れを閑却して居る傾向があるのは洵に遺憾の至りである、例へば體格が優れて大きな立派な牛は賣つて了い自己の繁殖用には却つて劣等なものを飼養すといふやうな有様になつて居るから、體格は漸次劣退して、優良なるものは少くなりつゝあるのである、牛の改良上から見るとその基礎を破毀してをるやうなもので、若しも此の趨勢に任せておいたならば優良なる朝鮮牛の

名聲は遠からず失墜するに相違ない、眞に嘆息すべき次第である、故に一般種牛の選擇に注意し之れが實行に努めなくてはならぬ、今や各地に種牡牛を配り又は民有の良牡牛を保護して種牡牛に選定してあるから、是等の牛の種付を爲して良犢を得る様にしなげればならぬ。

種牛の選擇と相俟つて必要なことは飼養管理の改善である。即ち良種牛によりて傳へられたる良形質を保ち、且つ一層之れを優良なる牛にするのには、良飼料と周到なる管理とに依らねばならぬ、故に將來牛の改良増殖につれて、特に野草を保護し、又其の地方の氣候風土に適した牧草を選みて栽培しなくてはならぬ。

現在の農業經濟の状態では、牛は役用を主とし之れに肉用を兼ねし



むる事は最も適切な方法であるから、將來も此の方針に従つて鮮牛の特能を保たしめ、且つ益々發達せしむることを主眼としなくてはならぬ、勿論郡邑附近若しくは特種の飼養者は、肉用又は乳用の目的を以て飼養するものありとしても、それは極めて少數にして、一般に適すべきものでないから、大體に於て前述した方針によるのが完全である、されば朝鮮農家に牛の改良増殖上一通りの知識を與ふることは、最も必要と思はれるから、その概要を述べることとする。

## 牛の選擇

牛の體格、能力は千差萬別である、例へば甲は一方の能力は非常に優れて居るも、他の能力が劣り、乙は全く之れに反するものがある

又同一牛でも其氣候、風土若くは飼養管理の差異によりて體格、能力、健康などに著しい相違を來たすことがある、それで飼養の目的に依り此等の關係を能く考究した上にも尙ほ其地方の經濟狀態を顧みて、境遇の似た所に育生したもので其目的の能力を充分に利用し得らるゝものを選ばねばならぬ、就中其地方に新しき種類又は境遇を異にしたものを飼養する場合には深く注意を拂はなくてはならぬ

## 用途と體格

牛は種類に依りて其用途を異にし、主に使役の爲に飼養するのが役  
用で、肉を生産せしめんが爲に飼養するのが肉用で、乳汁を搾取せ  
んが爲に飼養するのが乳用である、尤も單に一の用途にのみ適する

ものもあれば、二、三の用途を兼備するものもある、此の如く其用途が異なるにつけ、自から飼養管理の同様でないことを知らねばならぬ、従つて其形質にも差異を生ずる譯になるのである。例へば肉牛は目的が肉であるから、早熟早肥を促進する結果骨は成長が速かであるが、程なく其發育は停止して體軀、肉附を増して幅は廣くて短かい、役牛は之れと反對に晩熟で骨は太く長くて體軀亦長きも筋肉は比較的少ないものである、今役に適すべき牛の標準を掲げてみれば、體軀は稍々輕快に見へて四肢強く蹄堅く筋骨の發育が良好で而も力量がありて、性質は柔順に忍耐力強く、又風雨寒暑にもよく抵抗して、疾病にかゝることが少なく、繁殖力は甚だ旺盛である、併し一般に晩熟で其體格の各部は次の通りである。

頭あたま、適當てきとうの太ふとさで稍や長ながきも大おほき過ぎたのは改良かひりようされなうい牛おほに多おほく狭せま小せまに失すずるのは體軀からだの虛弱かよわいものである、牡おすの頭あたまはいかにも勇壯いさまであるが牝めすの頭あたまは優美やさである、眼めは活氣いきあるも溫和おたな相そうを表あらはし鼻梁はなす直じくして鼻孔及鼻鏡はなのあなは濶ひろ大おほきで、耳みみは沈著おちつきで鈍にぶくない、角つの、堅牢かたくにして質緻密きめこま、角つのと角つのとの間隔あいだが廣ひろい。頸くび、稍長やくて、上縁うへのほうは筋腱にくやすぢの發育はつがよく、胸垂むねかわが短みじい。肩かた、よく發育はつして強大つよくふなる鬚甲きかうに固着かたくつくして居おる。胸むね、胸廓むねの容積かさが特とくに大おほきい。脊及肋骨せ、脊せは直まつで肋骨あはらはよく張はつて居をる。腰こし、真直まつで廣ひろく且かつ肉附にくつきが宜よろしい。胴さう、よく張はり丸まるくて長ながい。

十字部、廣く長く筋肉よく發育して微に後方に傾斜す

尾、餘り大きくもなく、小さくもなく、先づ中位で、尾に力があり

て尾着部は高過ぎてはいけない。

四肢、骨は大きくて長く肉緊まり腓の發育は佳良で蹄は堅い。

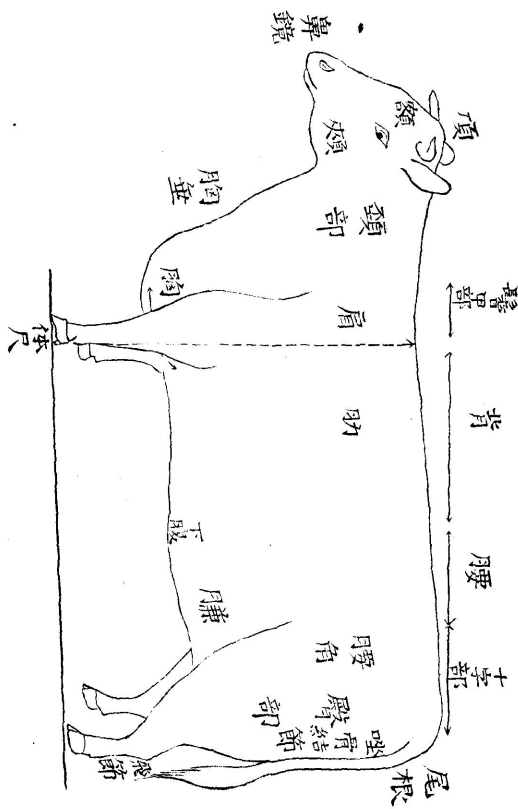
以上述ぶる所を總括すれば、役牛は體格が整然として筋骨が逞ま

しく行歩が確實で、舉動が活潑でなくてはならぬ、朝鮮牛は前軀の發

育は宜しいけれども後軀殊に十字部が狭く且つ甚たしく傾斜して居

るから、此の點を改良しなくてはならぬ。

# 牛體重要名部稱



牧羊指南

牛ノ體軀ハ次ノ各部ニ就テ測ル

體 尺 タイ シヤク 鬚甲部ヨリ地平面ニ至ル キカウブ テノン イタ

頭 長 アタマノナガサ 前頭隆部ヨリ鼻鏡ノ上縁ニ至ル アタマノタカイトコロ ハナサキ ウエ イタ

角 間 ツノトツノノアヒダ 線 前頭隆起ノ上テ兩方ノ角間ヲ測ル アタマノタカイトコロ ウエ ツノトツノトノアヒダ ハカ

頸ノ長 クビノナガサ 第一頸椎ヨリ第一背椎ノ棘狀突起ニ至ル ダ イイチケイスイイ ダ イイチハイスイ キヨクジヨウトツキ イタ

胸 圍 ムネノマハリ 肩ノ直後ニ於ケル胸廓ノ周圍 カタ スグウシロ オ ム ネ マハリ

腹 圍 ハラノマハリ 臍部ニ於ケル腹ノ周圍 ホツノトコロ オ ハラ マハリ

腰角ノ幅 コシカドノハバ 兩腰角ノ幅 コシカドヨリコシカドノハバ

體 長 カラダノナガサ 肩端ヨリ臀端ニ至ル カタサキ シリノハシ イタ

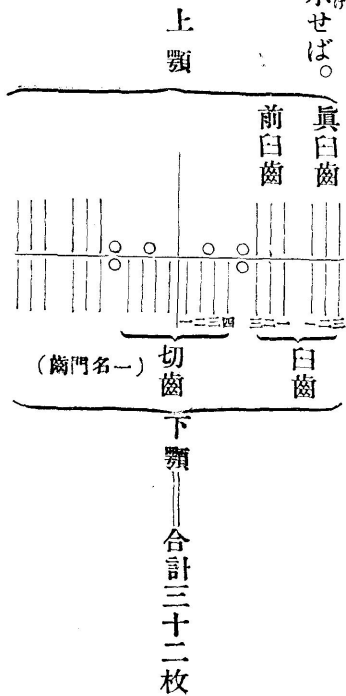
前軀ノ長 マエミノナガサ 肩端ヨリ肩ノ後上縁ニ至ル カタサキ カタ ウシロウエ イタ

中軀ノ長 ナカミノナガサ 肩ノ上後縁ヨリ腰角ニ至ル カタ ウシロウエ コシカド イタ

後軀ノ長 ウシロミノナガサ 腰角ヨリ臀端ニ至ル コシカド シリノハシ イタ

# 年齢の判断

年齢は牛の能力を判断するに必要な標準であるから、其の賣買又は使用に當りて先づ年齢を知らねばならぬ、年齢を知るには主に齒の顯出と脱換とによりて判断するのである、今判り易いやうに其の一般を示せば。





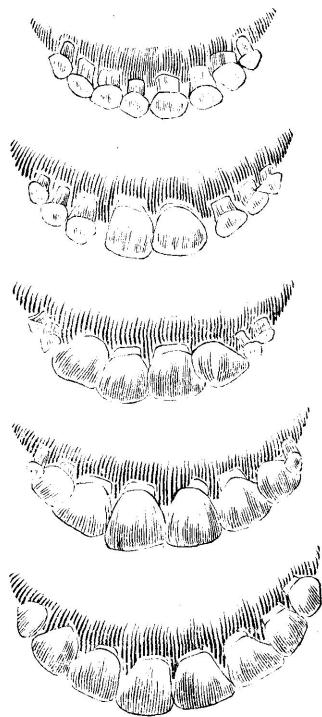
切齒

- |         |                |
|---------|----------------|
| 第一乳切齒顯出 | 生時の前後より三週後に至る迄 |
| 第二乳切齒顯出 |                |
| 第三乳切齒顯出 |                |
| 第四乳切齒顯出 |                |
| 第一切齒脱換  | 十八箇月より二十箇月迄    |
| 第二切齒脱換  | 二歳より二歳半迄       |
| 第三切齒脱換  | 二歳半より三歳迄       |
| 第四切齒脱換  | 三歳半より四歳迄       |

白齒

- |          |              |
|----------|--------------|
| 第一乳前白齒顯出 | 生前又は生後二乃至三週間 |
| 第二乳前白齋顯出 |              |
| 第三乳前白齒顯出 |              |
| 第一前白齒脱換  |              |
| 第二前白齒脱換  | 二歳より三歳迄      |
| 第三前白齒脱換  |              |

十八ヶ月より  
二十ヶ月迄  
二歳より  
二歳半迄  
二歳半より  
三歳迄  
三歳半より  
四歳迄  
四歳半より  
四歳半より  
五歳迄



満五歳以上になると齒の磨滅の度に依りて判斷するが之れは正確ではない。

前表は唯概要を示したるものに過ぎないが、牛の種類、發育の良否、飼料の剛軟、疾病等によりて齒の脱換、磨滅に少し位の差異はある。

又角を見て其の年齢を推定することが出来るけれども、齒を見て判断するのよりも、不正確である、元來犢は生後二、三ヶ月で角を顯出し其の尖端は圓く一寸圍子でもつけたやうだが、だん／＼年月の經つにつれて長くなり、其尖端は鋭く光輝が出て来るやうになるから、角の長さを見て年齢を推測することも出来るけれども、疾病や又は營養が不良の爲めに角の發生が晩くなることもある、又牝牛の角には凹輪がある、之れは角輪と云つて妊娠中胎兒の發育が旺盛になると母體は多量の營養分を奪られ、又分娩後多量の營養分が乳汁に出るから母體の養分が不足となり、此期間には角の發生が悪くて凹輪を現はすから、角輪の數は即ち分娩の回數を示すものである、それで最初の分娩を三歳と見れば之れに角輪の數を加ると、年齢を

知ることが出来る譯であるが流産や不受胎等のときは角に凹みが出て来る暇がないから、輪と輪の間が長く隔たることになる又往々角輪のはつきりしないのがある。

## 種牛の選擇

總て動物は其の形質を子孫に傳へるもので之れが遺傳といふものである、遺傳は良點も傳へるかはりに又缺點をも併せて傳へるものであるから、良犢を得んとするには是非其根本となるべき種牛の選擇に注意せねばならぬのに、朝鮮ではこの肝要な牝牛の選擇を等閑にして居るのは一大缺點である、まして牝牛は年に五六十頭以上の牝牛に種付するので、その影響は大きなものであるから、

牡牛は牝牛よりも殊にその選擇が大切な道理である。

此の如く種牛の選擇は牛の改良上實に偉大な關係を以て居ることが解る、今種牛の選定上に注意すべき重要な事項を略述すれば。

- 一、年齢滿二歳以上なる事
- 二、體軀整然として能力の優れたる事
- 三、體質健全にして性質溫和なる事
- 四、生殖器完備して其機能完全なる事
- 五、疾病又は惡癖なき事
- 六、異性の雙子の牝牛は繁殖用に供せざる事

繁殖の期間

牛の妊娠期間は大約九ヶ月半(二百八十五日)で毎年一同分娩せしめても左程衰へるやうなことはないが、餘り早く種付すると衰弱が速かで長く使用することが出来ないのみならず、胎兒の發育が不良で良犢を得ることが困難である、早熟のものは一歳未満で發情するけれども、直ちに之れに種付をするのは大變な間違である、朝鮮牛は晩熟であるから滿二歳若くは二歳以上で體格が充分に發育したものをを用ひねばならぬ、繁殖に供する年限は牝牛は通例十二、四歳位で牝牛は十一、二歳位迄である。

## 發情と種付

牝牛は種付の年齢に達するとその後は何時でも牝牛に種付する事が

出来るけれども、牝牛は時を定めて發情するものであるから、其の時を逸さず種付けせねばならぬ、牡牛の種付回数は若い時は一年に三四十頭位に制限し漸次年と共に増加し満五歳に達すれば百頭を限度とし一日二回を超えてはならぬ、一日二回種付する場合は必ず朝夕に使用ものであるが、普通種付は一日一回が宜い。

牝牛の發情期は二十四時間乃至三十六時間（時としては四十八時間以上）繼續し、種付しても受胎せぬ間は約三週毎に同じやうに繰返すのもである、發情の兆候は初め舉動が一變して喧噪し、其の最も著しいものになると前肢を以て床或は土を掻き臥藁を蹴出し、又放牧すると他牛の背に跨り或は他牛を自分の背に跨らしむることがあり、一般に食欲が少しく減るものである、種付は發情の充分に

熟した時、静かな場所はしよで無用の人ひんを遠ざけ、框わくの内に繋ぐつなか又は短またみじかく牽綱ひきつなをとりて之これを保ち、牡牛をすを誘さそひ來りて種付たねつけするのであるが若しも牝めすか牡をすか何れか、高くして種付たねつけが困難くわんなんであるならば、後肢あごあしの立てる地盤たつを高くしたり又は低ひくくしたりいろくど手てを添そへて助たすけなければならぬ。

## 妊娠はらみと妊娠牛はらみうしの注意ちゆうい

妊娠はらみは普通なみ九ヶ月半げつはん即ち二百八十五日にちであるが、早いはやのは二百四十日にち、遅いおそのは三百二十一日位にちぐらゐのものもある、受胎はらみの初めはじは判然はつきりしないけれども普通なみの場合ばいは發情さかりがないので解わかるけれども、時まには受胎はらみして居ゐりながら發情さかりを繰くり返かへす牛うしもあるから、注意ちゆういしなくてはなら



ぬ、この場合の發情は不規則で三週以内に反復することが多い。○  
 妊娠の前半期を経過すると胎兒が發育し、右腹側が膨大して來るものである、妊娠中は管理を丁寧にし、ものに恐怖せしめぬやう又物に衝突らぬやうに注意するのは勿論で、過激な運動も避けしめて萬事安靜にさせなくてはならぬ、さりとて全く繋いではかり置くのはよくないから、時々適宜の運動をなさしめ、飼料は良質のものを選んで適度に且つ規則正しくし、一時に多量を給してはならぬ、飲水は餘り冷たくない清涼なものがよい、分娩に近くと腹部は益々垂れて臍部と尾着部は却て凹み、尻の兩側の肉は落ちこんで臀部は弛緩し乳房は大きく膨れ、陰部は赤色若くは藍赤色になりて潤ひ膨れて濃厚粘液が漏れてくる、此の如き兆候は通例分娩前約二週に現る、

が常であるが、稀には分娩前五、六日に見ることもある。

## 分娩と分娩後の注意

牛が産氣づくど物に驚く様な状をなし、又聲を放つなど不安の様子が見えるのが普通である、此の時はや分娩陣痛と稱する痛みが起つたのである、次で強き陣痛につれて胎兒は前肢の間に頭を挟みて産れ出て来る若しも分娩が困難である場合は人が手を添へて其の陣痛に伴れて靜かに引出してやらねばならぬ、併し之れが逆兒であたり又は横になつてゐたりするこごがあるから、一旦之れを正しき位置に整復した後に引出すことにせねばならぬ、牛は普通三、四十分間で分娩を終るものである、かくて、産犢の臍帶は自然に狹小部

から斷離するものだが、若し切れぬ時は臍部から掌の幅程隔たつたところを、清潔な強き糸で堅く結紮して結び目を少し離れて切らねばならぬ、産後二時間より七時間位で再び陣痛が起つて娩隨が出て來るものだが、若しも之れが二十四時間を経ても出て來ないやうな場合には手を挿入れて靜に之を採出さなくて、はならぬ、娩隨は決して母牛に食はせず、適當の場所に埋むるか又は相當の處置をせねばならぬ、産犢の強壯なものはその儘放任してをいてもよいけれども、體の全體に粘液が附いて居るから冬期は體が冷却することが甚しい、それで糠や麩のやうなものか又は鹽を撒布すると、母牛は之れを丁寧に舐めつくして早く乾燥するものである、母牛が犢を舐めるのは犢の皮膚を乾燥せしむる外に血液の循環をよくして元氣を増





	十二	月	二	三	四	五	六	七	八	九	十	三	三	三	三	四	五	六	七	八	九	十	月	二	三	四	五	六	七	八	九	十
種付日次	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十		
分宛月次	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十		

備考 例べば二月の十日に種付すれば月は上欄の種付月次(二月)

日は種付日次の下にある(一〇)と出合たる(十一月廿一日)の分宛となる

### 飼料の種類

牛の飼料の主なるものは草と穀菽類である、草は牛の天然の食物で最も適したものであるから充分に興ふるやうにしなればならぬ、併し春になつて青草を喰ひ始める時には喰ひ過ぎて胃腸の疾病を起す

ころがあるから注意しなくてはならぬ、成る可く新鮮なもので毒草  
 なごの混せざるやうにし、また雨露に濡れたものを避けねばならぬ  
 青草のない時期は乾草がなくては牛を飼養するに甚だ不都合である  
 然るに朝鮮では乾草を貯蔵することが一般に行はれて居らぬから冬  
 期飼料に不足して牛は非常に痩せて春になつても容易に此れを恢復  
 することが出来ない、また折角良牛を有ち乍ら冬期飼料のない爲め  
 止むなく廉價に牛を賣り放つて了はねばならぬやうな場合も少なく  
 ないから、冬の用意に草の花が將に開かんとする頃に刈り取りて能  
 く乾かした後程よき場所に積み、その上に菰か蓆の様なもので雨覆  
 をなし、腐らぬやうにして置くが宜しい。

朝鮮では野草を燃料にする量が多いから、牛を改良し又はその數を

増殖するには野草のみに依頼せず、牧草を栽培して飼料の供給を潤澤にしなければならぬ、即ち原野、山麓、溜池の堤、畦畔、河川の沿岸などに牧草を播種又は移植して漸次野草に代ゆることが肝要である、朝鮮に適する牧草の主な種類は次の様なものである。

荳科

一、青刈大豆

二、胡枝子

三、赤白詰草

四、アルファアルファ

五、燕麥

禾本科

六、鵝冠草(かもがや)

七、テイモセー(おほあはがへり)

八、レッドトップ(こぬかぐさ)



詰草つめくさやアルファアルファあーあーは雜草地くさちに播種まするも發生そだちし、燕麥ねんばくは大豆だいづの前作まへさくとなり大豆だいづは又桑園またくわはたや果樹園くわじゆへんなどの間作かんさくとすることも出來できる。穀菽類こくじくの藁程わらからは營養分やしなひぶんは少ないけれども、大豆だいづなどの濃厚飼料やしなひあるかいりょうと混まじて與あたへると消化ごなれを助たすくる効能きりかがある、又乾草またほしくさがなくて穀物こくちつのみの場合ばいなどには是非ぜいひこれを用もちひねばならぬ、其他牛そのほかうしの敷料しきりょうに缺かくべからざるものである。

穀菽類こくじく中で大豆だいづは到いたる所に生産できし、牛うしの飼料かいりょうとして廣ひろく用もちひられ牛うしの力量ちからを増ますから、役牛やくひうしには最もつも適當てきとうして居をるものである、これは半熟はんじゆくの程度ほごに煮にるか、若もしくは水みづに浸ひたし柔軟やはらかにして、藁程類わらのるいと、混まじて與もちふるものである、大麥おほむぎも燕麥ねんばくも、亦牛またうしに適てきした飼料かいりょうで、大豆だいづと同じく、藁程類わらのるいと共に與もちふるけれども、挽割ひきわりにして生なまの儘まが宜よろ

しい、以上の外穀、米糠、麥糠、粟糠なども牛の飼料として用ひらる。

鹽は飼料に風味を附與し、食物の消化を助くる効能があるから甚だ必要なもので、食物に混ぜて毎日少量を與へるが宜しいが、効能があるからと云つて餘り多量を給與すると却つて害になるから注意せねばならぬ。

## 飼料と飲水の給與

飼料は牛の年齢、用途、季節などによりて其の分量に差違がある、又地方の實況に應じて、經濟上有利な種類の飼料を選ぶことが最も大切である、抑も牛が單に生命を維持するだけの爲ならば、飼料は

澤山は要らないけれども、成長中の犢又は用役をなさしむる牛には營養分に富むものを必要の程度に給せなければならぬ、若しも飼料が不足すると、犢は發育が不充分で成牛は用役に對する力を減じ體は瘦せ衰へる、之れに反して過分な飼料を興へるときは經濟上に損がありて、衛生上の害をも生ずるに至るのである、それで飼料の分量を一定することは一寸困難な場合もある。

春、夏、秋は青草を主なる飼料とし、勞役に使用するときは、その外大豆か大麥又は燕麥などを興へ、冬期は乾草の外に穀菽類、糠類、藁稈又は豆の莢及莖などを適當に興へねばならぬ

朝鮮では習慣上飼料を煮て興へることになつて居るが斯くすると品によりては幾分消化はよいけれども、燃料を費し、經濟で、且つ



燃料には主に草を用ひておるから、之を廢するときは燃料に用ふべき草を牛の飼料に充つることを得て、飼養數を今よりも増すことが出来る。

飼料を給する時間は可成規則正しくし、回數は一日に二回若くは三回と定めるがよい、又飼料の種類を變へんとするときには漸次に之れをならさねばならぬ、若し急に飼料を變へると胃腸を害し、妊牛は之れが爲めに往々流産を來たすことがある、其他飼料を給する器物は常に清潔に保つことに注意しなければならぬ。

飲料水は極く清潔で爽かな味のあるものを與へ、池水、溜水などの色あり臭あるものは之れを避けねばならぬ、給水は朝夕二回飼料を與ふる前が宜い、食後直に水を與ふると消化を害する恐れがある。

空腹の時又は渴の甚だしい折に多量の水を與ふるは頗る危険であるから、此の如き場合には少量づゝ數回に分ち器に入れて飲ませるのが宜しい。

## 放牧と繋牧

放牧は最も牛の衛生に適へるは論なき所であるが、土地の状況、用途の關係、經濟上の事情などによつて、その方法は必ずしも一様ではないが、普通放牧に要する面積は、一頭に對し草立のよい肥沃の土地で一町四、五反歩、不良な所なれば五、六町歩位を要するものである。

牧場には清水と適當の防風林があれば最も結構である、尙ほ注意

して置きたいことは放牧の時期である、草は早春芽の出た丈では  
まだ養分に乏しくて牛の收牧には適しない上に草の發育を害する  
から不利益である、それで草の適當に繁茂して養分が充分出来る  
時まで牧場を保護することが肝要であるけれども、既に花去り實を  
結へば草の養分は減るものであるから、それまでの間に都合のよ  
い時を見計りて放牧しなくてはならぬ、但し犢は草のある間は放牧  
しても差支がない。

朝鮮では繩を以て原野に牛を繋ぎ草を喰はしむる習慣になつて居る  
所が多い、之れが所謂繫牧法である、木柵や土壘其他の物で境界を  
設け牛を自由に放牧することの出来ない場合には、少し手數ではあ  
るけれども極めて容易い方法で、且つ飼料となるべき草を無益に牛

に踏ふましめぬ利益りねきもある。

朝鮮てうせんの草生地くさちの中には、草くさの生育おひたらよき善良せいじやうなものも少すくないけれども、一般おほくに之これを保護ほごしないで草くさのまだ成長せいちやうせぬ時ときに牛うしを放牧ほうぼくして、その發育はついくを害がいし或あるひは小面積せまいまこくに多數おほくを放牧ほうぼくし、或あるひは放牧期間ほうぼくかひだの長ながきに失すびすることなど、凡すべて牧場ぼくじやうの荒廢あらしを來きたすものであるから、此かくの如ごとき弊害へいがいは宜よろしく速すみかに矯正ためして其その利用りやうを充分じゆうぶんにせねばならぬものである、又土地またちちの開ひらくるに伴ともひ草生地くさちは漸々ぜんぜん尠すくなくなるから是こゝに牧草ぼくそうを播種はきし野草やそうに換かふことが必要ひつようである。

犢ごうし、種牛たねうし、役牛はたらきうしの飼養法かいかた

犢は飼養法の如何によりて善くもなり、又悪くもなるので、その最も大切な時期は離乳期から固形飼料に移らんとする時である、この時期は犢の體質がまだ纖弱で疾病に罹り易く又筋骨の盛な發育をなすには、多量の養分を要するから、飼料の種類、分量等に注意せぬと折角親牛より受けた良質をも現はさなくて止むものである、それでは離乳後は養分の多い消化し易い飼料を與へ、青草のある季節には草生地くさぢに放ちて自由かづてに草を喰はしめ、充分じゅうぶんに運動うんどうをさせることが肝要である。

犢の飼養は勿論粗放ではよくないけれども、餘り丁寧に過ぎても却つて體質を弱めるから、程能き度合に飼養せねばならぬものである。



種牛には良飼料を與へなければならぬけれども、餘り肥滿することなく、而かも瘦瘠することがないやうに、常に中肉に保つが宜しい、飼料が、濃厚に過ぐると、種牛は肥滿して、動作が不活潑となり、遂に情慾が衰へる、併し、餘り粗末な飼料では、營養が不足で精力が弱くなつて、繁殖力が減じてくるから、飼料は牛の年齢と體格の大小と種付の度數などに應じて程能く加減することが肝要である。

又種牝牛の分娩に近いものは自分の體を養ふの外に、發育が盛んである胎兒をも養はなくてはならぬから多くの養分が必要で、分娩に際しては體力を消耗し、分娩後には犢に乳汁を與へるから、充分の養分がなくては母牛は衰弱し、犢も發育が悪くなる、それで良飼料

を興へねばならぬ、又冷水の多量、水分過多の飼料、腐敗したる飼料等は流産の原因となることがある。

役牛は骨格還ましく筋肉が強く太で脂肪の餘り多くないものが宜しい、骨格の纖弱なものには強く太き筋腱は附かないもので力の強い道理はないから、犢の時から良飼料を興へてその發育を充分にせねばならぬ、早や成長して劇役に堪ゆるやうになつた後は、飼料の分量は勞役の程度に應じ身體の營養を基として適宜に増減することが肝要である。

使役の時間は勞働の多少、難易にもよるけれど一日十時間を超えぬやうに心懸け、飼料は一日二三回に分與するが宜しい、併し三回以上になると反芻の暇が少ないから却つて牛の爲に宜しくな

いものである、又食後は必ず休息せしめなくてはならぬ。

役牛の體力を恢復せしむるには放牧するか、繋牧するか、最もよろしい、使役を始むるに適當な年齢は通常二歳半頃からである、初めは輕役に服せしめ種々の躰をなし、漸次劇役に移らしめねばならぬ、尤も産地や發育の有様で多少の差はあるが、充分成長しない牛に過度の勞働を課するのは、體を頹す基であつて其結果は完全に力を利用することもできず、又早く廢役に陥らしむるものである。

## 肥育法

肉牛でも乳牛でも役牛でも皆其の最後は肉を利用するのであるか

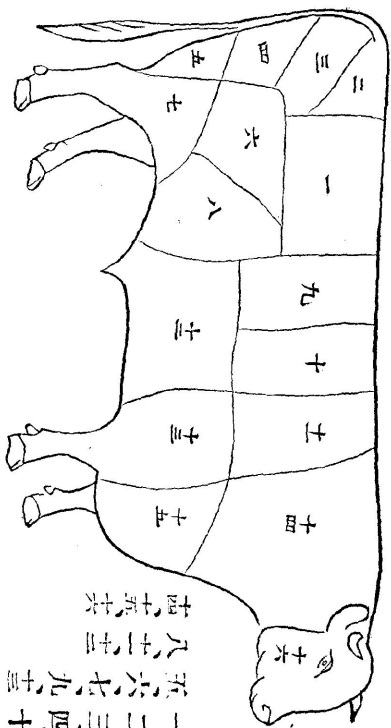
ら、屠殺前に肥育を施せば肉量を増しその上に肉質をも改善するの  
で利益が多い、併し牛は年齢の老けるに従ひ漸次肥育の効果が減る  
ものである、殊に老牛は胃の消化力が衰ふる爲に良飼料を興へて  
も充分に肥育することが困難であるから、甚しく年齢の進みたる牛  
は寧ろ肥育法を行はないで賣る方が得策であることがある、鬪牛  
は肥育性に富んで居るから、肉用を目的とする牛は去勢を行ふと其  
の効果が著しい。

今肥育法に關する要件を左に略述する、

(一) 消化し易く且つ嗜好に適したる飼料を選むこと、(二) 牛舎は可  
成暗く且つ溫暖にして而かも新鮮なる空氣の流通を能くすること、  
(三) 牛舎と之れに附屬する飼槽などは總て清潔にすること、(四) 牛

は可成安靜なるべくしづんに保ち物たもものに驚かぬやうにすること、(五)輕微すこしの運動うんどうは必要ひつであるが決して度けつを過ぎぬこと、(六)時々食鹽まじくしほの給與あたへを加減かけんすること。

飼料かひれうの種類しゆるいは肉質にくしつに關係くわんけいを及ぼすものであるから、能く注意ちういして選擇ひすることが肝要かんようである、一般いっはんに乾燥飼料かはいたかいろは筋肉にくが緊まりて肉質にくしつは佳良よいであるが、水分みづけの多い飼料かひれうは筋肉にくに水分みづけが増し肉質にくしつは劣るものである、又肥沃またこのたな牧場ぼくじやうに放牧ほうぼくするのは肥育ひいくの初期はじめに効驗しるしがあるけれども其未期そのおほりに至らば必ず舍飼かならしやがいするが宜しい。



屠肉の標準

- 一 二三、四、十五
- 二 五六、七、九、十三
- 三 八、十二
- 四 五、六、十六
- 四等肉
- 三等肉
- 二等肉
- 一等肉

取扱と運動

牛を取扱ふには親切で決して粗暴ではならぬ、取扱が丁寧である  
 と牛は従順で人の命令に従ふものであるから、役用の牛には殊に注  
 意せばならぬ、取扱が粗暴であると恐怖又は憤怒の念を増して御  
 し難く遂には物の用に立たぬものもある、若し發育盛んな犢が一旦  
 こういふ性質になつたならば、容易に矯正することが出来ない様に  
 なるから注意せねばならぬ。

運動は牛を健全にし其能力を増加するものであるから何れの用途の  
 牛にも必要である、若し運動が不足であると種牛は肥満して繁殖  
 力が衰へ、犢は體軀の發育を完ふすることが出来なくなり、其他の

牛も健康性を減じ、其能力を充分に發揮せず、丁るから、凡て適度の運動をさせねばならぬ。

牛は原野に放牧するのが最も本然の生活状態に適する運動で、新鮮の空氣を呼吸し、綠草を喰い自由に逍遙し、外氣に曝露されて皮膚を強め、寒暑に對する抵抗力を増して疾病に罹ることが少なくなるものである、若し放牧が困難な場合には繋牧するのも宜しい、又柵を作りて其内に放つなど適宜に運動の方法を採らねばならぬ。

## 牛舎と手入

牛舎は可成夏は涼しく、冬は暖くして、乾燥に便なる様に構造し、濕氣ある所は宜しくない、其方向は南か東南で、北や西は避けね



ばならぬ。

牛舎の北には寒風を防ぐ設備が必要であるから、木を植ゑるか又は土壘を築くか、其他便宜の風よけをするがよい。

牛舎は土壁か板壁で、之れに窓を設け光線を導き、且つ換氣を行ふ様にし、床は可成板張で僅に勾配を付け、溝より尿を舎外に導く様にすることが肝要である。

糞は度々取去つて堆肥場に置き、舎内を清潔にし、敷藁を給して牛の膝傷を防ぎ、且つ糞尿に汚されぬようにするがよい、又藁は冬湿度を保ち肥料を得る利益がある。

牛は汚れやすいから能く皮膚をすり垢を取り、常に清潔にせなければならぬ、全身を摩擦すると、毛の光澤を増し、皮膚を強くし、血液

の循環を良くし、疲勞を慰むるものである、然るに朝鮮では一般に  
手入が行き届かぬので、牛が極めて不潔であるから、毛が脱け虱が  
寄生するものが少なくない。

汗や雨などで牛がぬれた時には、糞などで濕氣を取り、肢や腹など  
に附いた泥も清めねばならぬ、夏なれば川に入る、か水で洗ふか、  
冬なれば微温湯を用ゆるがよい、何時でも洗つた後は糞にて充分に  
濕氣を拭ひ去ることが必要である。

蹄は大切なもので、殊に役牛の蹄の善悪は使役上に大なる關係を  
有するものである、糞尿や泥土などに汚れたまゝ、長く放任すると  
蹄質が柔軟となり或は蹄裂より腐敗を起すことがある、又舍飼は  
蹄の擦摩が少ないから、延び過ぎて歩行や起臥に困難する様になる

から斯る場合には削蹄を要するけれども、豫め運動せしむるか使役すれば此を防ぐことが出来る。

夏の水浴は、河底が砂で清水の場所を選び、沼水、溜水などは避けねばならぬ、水浴の時間は十分内外で、汗をかいて居るときや食後には宜しくない。

### 装蹄と鼻環

原野に放牧する牛は蹄の成長と磨滅とが平均し、常に程よき長さを維持するけれども、使役に供する牛は、蹄の磨滅が多いから、之を防ぐ必要がある、装蹄も其目的の一である、朝鮮の役牛には古來装蹄の習慣があるのは喜ばしいことである、唯その術が巧でないのと

装蹄法の不完全なるのは缺點である、装蹄するには牛を柵に入れ起立せしめて之れを行ふのと、縛倒して四肢を集めて一束に結び装蹄するのとの一一法があつて、地方々々別々に行はれて居るが、後者は牛に苦痛を與へ時には骨を折傷するなど種々の危険がある、且つ又牛は苦痛を避けんとして遂に惡癖を生ずる事がないとも限らないから、縛倒法は止める方が宜しい。

役牛に鼻環を嵌めるには、生後六ヶ月から一ケ年半位の間に行ふが宜しい、鼻環は左と右の鼻孔を界して居る部分の前の方の軟骨のない所に突き通すのである。

## 去勢の効用

茲こゝに去勢きんきりといふのは、牝牛をうしの罌丸きんの機能はたらきをなくすることである、性質たが粗暴あらくであつて制御さびあつかいし難いにくものも、去勢きんきりすれば従順おとなしくで使役つかひし易やすく、且かつ其肉質そのにくが佳良よくとなり、肉量にくも増加ますし、又肥育またこやすに適するかなふものであるから、去勢きんきりは特に肉用にくようの牛うしに利益りねきが多い、其他おほ形質そのほかたちせいしつの劣等わるいなもので繁殖用はんしよくように供し得ねられぬものは去勢きんきりするがよい。

閹牛きんきりうしは牝牛めすめすの中間ちゆうだの性質せいしつを得るものであるから、牝牛をすが成長ふさびてして早はやその特性ちゆうまへを發いだしたる後のちに去勢きんきりしたるものは利益りねきが少すくないので、肉にく用牛うしは生後うまれて一、二ヶ月以内つきかうちがよいけれども、役用牛はたらきうしは餘あまり幼稚わかの時ときに行おこへば筋骨からだが完全よくに發育はついくしないから、生後うまれて一ヶ年内外ねんぐらうの時に春季はるきに去勢きんきりするのが利益りねきである。

## 病傷やまいきづの注意ちゆうい

健康牛の状態

健康な牛は飲食、反芻等に變りがなく、眼は明らかな

にして穏和で、被毛には光澤がありて、舉動は活潑で異常なく、

鼻端はよく濕潤し呼吸は平穩である。

病牛の徴候 病牛の徴候は病氣に依りて異なるけれども、一般に元

氣がなく、食欲や反芻等も常と變り、種々の徴候が顯れ、久しく病め

ば被毛は光澤を失ひ、體軀は瘦削し舉動が鈍くなる。

今左に起り易い病傷に關し農家の心得となるべき概略を説明するこ

と、する。

牛疫 牛疫は牛、羊、山羊等に發生する傳染病で、傳播が速か

斃死の多い獸疫の中で最も恐るべきものである。

病毒の潜伏期は普通六日から九日迄の間で、初めは體温が高くな

りて悪寒戰慄し、元氣も食欲も衰へ、一兩日の後は食欲も反芻も止み唯水のみを食るやうになる、眼、鼻、陰門などより液を漏し且つ多量の涎を流し、糞は初めは硬く、二、三日經つと流動状となり、間もなく甚しい下痢を起して悪臭を放つ、發病後二、三日で口内は齒齦、唇、頬の内面などに糠を散布したやうな部分は一兩日で暗赤色の爛斑となる、肛門や陰門にも同様の變狀がある、之れが本病の特徴であるけれども、輕症には爛斑を見ざることもある、普通一週間位で斃死するものが多い、斃死の割合は百頭に對して九十頭から九十五頭で、本病に罹つたならば容易に助からぬから、可成罹らぬやうに常に注意するのが肝要である。

病毒は病牛の唾液、涙、鼻涎、汗、糞、尿、血液、肉、骨、皮

臟腑等には皆含有せられて居るから、此等に觸れた人の手足や衣服や飼料、飼槽、壁、床など總て傳播の媒介物である、其他牛舎に入する犬、鶏、鼠、蠅なども媒介をする。

牛疫の發生したときは、一刻も早く警察官に届で、其指圖に従はねばならぬ、若しも之れを怠つたならば、飼養者一人の損失ばかりでなく、全體に非常の損害を與ふることになるから、決して隠すやうなことがあつてはならぬ、又交通遮斷、病牛の撲殺、屍體の處分、牛舎、器具類の消毒等は皆命令に従つて行わねばならぬ。

炭疽 炭疽は獸類及鳥類を犯す劇烈な傳染病で、人にも感染するものであるから危険である、牛疫程一時に大流行することはないが常に各地に發して絶へ間がないから、結局その損害は甚しいもので



ある、経過は頗る急劇で稀には微候を認むることなく斃死することがあるけれども、多くは初め熱發して呼吸が困難で食欲も反芻も止みて腹痛下痢を起し、間には狂ひ亂れて物に撞着するものがある、通常一、二日長さも七日位で斃死す。

炭疽は概ね口、鼻、眼、肛門等から出血するが、又皮膚、舌、咽喉等に腫物を發する。

病毒は病獸の各部に存在するけれども、通常病獸よりも人、器具、飼料、昆虫等の媒介で傳染するものである、人の本病に罹るのは、病牛の肉を食ひ又は手足などの傷より毒を受くるかであらある、本病の發生した時も、牛疫と同様に届出て、傳播を防ぎ消毒を一層嚴重にせねばならぬ、病毒は地中にあつて數年の長き間生き

残りて再び動物體に入りて發病の原因となるからである。

氣腫疽 氣腫疽は牛に發する急劇の傳染病であつて、皮膚に嘔

性の氣腫が出来、初めは少さくて痛を覺へ速かに蔓延して大きくな

り甚しきは全身に廣がることがある、牛は食欲も反芻も止みて大熱

を發し、肢は氣腫のために跛行し、或は肢を地上に曳くものもある

氣腫の蔓延するにつれ、呼吸漸次苦しくなり、時には痲痛を起し

急に虚脱して斃る、本病も亦發見すれば直に届出でねばならぬ。

流行性鵝口瘡（口蹄疫） 流行性鵝口瘡は、主に牛、羊、山羊、

豚等に發し、人にも傳染することがある、本病は通常速に傳播す

るけれども、治癒するものが多い、病初は熱が出て涎を流し、唇の

内面、齒齦、舌、鼻端、乳房に水泡が出来て後爛斑となる、又蹄冠、

蹄間の皮膚が赤く腫れ、一兩日で同じく水泡が出来、これが潰れる

ば牛は跛行となる。

病毒は病獸及其排泄物より直接に傳染し、又媒介物に由りて傳播するから、前同様の處置をせねばならぬ。

犢の赤痢(又白痢) 犢の赤痢は生後三日以内に起るものが多い、

本病に罹れる犢は、生れて一兩日能く乳を哺まず、屢く粥のやうな軟

便を下痢し、且つ頻りに努責するものである、糞は始め黄色であ

るけれども後に白色の粘液となる、之れが所謂白痢である、又腐敗

臭があつて往々血液を混ゆるものがある、病犢は衰弱し常に臥し、

時々痙攣を起し、涎を流し、一日乃至三日内に斃る、病犢は速かに

隔離して、牛舎や排泄物は嚴重に消毒せねばならぬ。

急性鼓脹

急性鼓脹は、胃中に多量の瓦斯が出来、腹部殊に左腹側

が急に膨れて大きくなり、打てば太鼓の様な音がする、食慾、反芻  
全く止みて便通なく、脚を開き背を彎げて立ち、呼吸苦しく遂に失  
うしなひ

神するから、此時直に治療せねば速に斃るるごがある。

簡単な治療法は、口に藁束を施し、之れに油脂の類を塗りて舐めさ  
せ暖氣せしむるか或は手が藁束で強く左腹側を按摩して頻りて冷水  
を灌げば効がある、輕症のものは靜かな牽運動で治癒するけれども  
重症は速に特別の手當をせねばならぬ。

食滯 食滯は、牛の過食から起る疾病で、背を彎げ屢々努責し、尾  
を掉り後肢をあげて腹を蹴ようとし、呻吟、苦悶、後體を顧み頭を  
振り、或は靜かに立ち、食慾も反芻も全く止て、往々水を貪り涎を

流し、頸を伸ばして暖氣し、又頻りに吃逆、嘔吐を催し、左腹側は膨れて硬くなり、之を壓すと牛は不快を覺へて避けやうとする。通便は初めは常の通りで時々少量づ、排泄するけれども終には硬き球塊となる。

療法は、數日間食を絶ち、輕症には盛んに運動せしめ、又腹部を按摩して暖氣を促すもよし。

流産 流産は寒冷の氣候、腐敗の飼料、過度の使役、腹部の打撲、峻下薬の投與等に原因することが多いけれども、亦流行性の流産もある、それで妊娠中は充分注意して流産の原因を避けねばならぬが、流行性のものは消毒が肝要である。

媼隨停滯 媼隨停滯とは分娩後子宮内に胎兒膜の滯留するの

を云ふのである、牛は分晩後概ね四時間乃至六時間で晩隨を排出するのが常であるけれども、若し之が出ない、冬季は四日、夏季は二日で腐敗するから、その爲めに牛は食欲が減じ、元氣も衰へ、或は全く反芻止みて危険に陥り遂に斃死することがあるから、適當の所置を施さなくてはならぬ。

鞍傷、鞍傷は、鞍の構造が悪くて牛背に適はないか、荷物の積載法が失宜であるか、鞍が動搖するか、皮膚の手人が不良である等により背部を磨軋損傷するものである、朝鮮では鞍傷に罹れる牛が甚だ多い、鞍傷は牛に苦痛を與へ、使役上不利なばかりでなく、牛皮の價値を落すから、充分之れが豫防をしなければならぬ。

鞍傷を豫防するには、牛背に適つた鞍を用ひ、鞍褥を厚くし、正し

鞍くらを著つけ、腹はら帯おびを緊しめ、鞅むな及が鞅むなを着きけ、荷に物は左ひだり右みぎ重量おもさを均ひとしく等に  
 し、使つか役い後ごは半はん時じ間かん乃なら至いた一じ時かん間かんの後のち鞍くらを卸おろし、鞍くら下した部たは直すちに藁わら束たば  
 で摩こ擦すするここが肝かん要ようである若もし鞍くら傷きずを受うけた場ば合あひには休やす養めるが第だ一いち  
 である、唯ただ少すこし腫はれが出でたここには冷ひや水みづで冷ひや却やし、重おも症いのものは、相あ  
 當あの治ち療りょうを施なさねばならぬ。

牛うし蠅はへ 牛うし蠅はへは其その形かたちが家いえ蠅はへに似にて、灰は色いろで、夏なつ秋あきの候とき、野の外のに飛と  
 翔まするもので、雌メ蟲むすは牛うしの皮かわ膚だに産たま卵ごんし、孵か化へして蛆うじとなり、皮かわ  
 下したに嚙かみ入いり冬ふゆを越こえ、翌あ春はる牛うし體たいを出いで地ち中ちゆうに入いり蛹まとなり、三さん四し週しゅう  
 で成お虫むしとなるのである、蛆うじが皮かわ膚だに侵い入りするときは孔あなを穿うつから、  
 牛か皮かわを傷きずつくる、又また蠅はへは傳でん染せん病びょうの媒なか介だちをなすここがある、蠅はへを防かぐに  
 は、樹き木ぼくを植うゑて蔭かげを作つくり、牛うしの避か匿かく場ば所じよを設たてるここが肝かん要ようであ

る、又鯨油、亞麻仁油、硫黃其他惡臭劑を牛の被毛に塗布すれば蠅を防ぐことが出来る、皮膚中に蟄伏する蛆は、手で殺すか殺蟲劑で殺すかである。

牛 蠅

幼 蟲



成 蟲



蛹

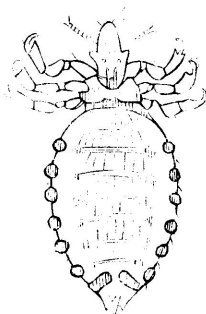
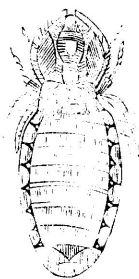


牛蠅 牛蠅は角の根部、尾根の皺襞、頭、項等に殊に多く寄生し牛は劇しき痒痛を覺へ、眠を妨げられ且つ營養を害ひ、局部は脱毛し、其部を他物に抵着して摩擦するから、出血することがある



これを驅除するには、「クレオリン」の二十倍液か、石油と酒精の合劑か、食用酢か、或は煙草煎を、溫暖な日に、被毛に塗布すれば効がある、若し一回で効能がないときには度々繰り返せば良い。

牛 虱 (郭大)

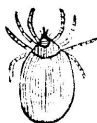


壁蝨 壁蝨は、體の摩擦を受くることの少ない部分、即ち内股、尾根、耳殻等に寄生し、甚しき痒さを與へ、又傳染病の媒介をなすことがある。

之れを驅除するには、手か櫛又は竹筥の類がよいけれども手数がかゝるから、石油、荏油の類を毎週二、三回塗布すると効があるが原野に多數發生したときには火入をすると、壁蝨を撲滅し又草生を良くする効能がある、壁蝨の居る牛舎は時々大掃除をしなければならぬ。

## 壁蝨

(自然大)



## 牛皮の改良

牛皮改良の必要、朝鮮牛皮の産額は、生牛と同様に甚だ大なもので、内地や外國に移輸出せらるゝ重要産物の一で、その需要の益々

増加するのは、明かである、然るに朝鮮の牛皮は、剥皮法が不完全であるのと、乾燥、荷造の粗雑なるとで、損傷が多くて工業用に供するごき廢棄部が多い爲め、皮の價が廉くなるのは、遺憾に堪へざる所であるから、之れが改良をなし利益を増す様にしなければなら

ぬ。

牛皮改良の方法、従來の剥皮刀は、大形で尖端の尖つた直刃刀で刃尖にて、牛皮を傷けるから、剥皮刀は、小形で刀身は、彎曲せるものを、選り、剥皮法を丁寧にして、皮の損傷を防がなければなら

ぬ。

牛皮は路上に擴げて乾燥さするから人畜の蹂躪、車輛の通行、泥土汚物の附着等著しく皮質を毀損するものである、又公衆衛生上

にも宜しくないから、此弊風は速に改めて、空地か、屋根の上に擴げて乾かし、夏季は風通が良くて、可成強烈な日光の直射せざる場所を選ぶが良い。

牛皮の重量を増すため、故意に泥土を塗り、牛の疾病の場合に、鐵を刺して血液を取り、或は烙鐵で皮膚を焼烙するので、牛皮に損傷が出來て品質を落すから、止めねばならぬ、又皮質を損する鞍傷を豫防し且つ之れが治療を怠つてはならぬ。

乾燥した牛皮は、其質が硬いから之れを幾重にも折疊み強く壓迫して梱包すると、折目に往々龜裂が出來るから、五、六枚合せて巻物にするか、又は剥皮後鹽皮にして乾かし巻物になすが良い、牛皮は乾燥せず鹽皮にして製革所へ送れば更に便利である。

# 朝鮮總督府訓令第九號

道

勸業模範場

畜牛ハ朝鮮ノ農業組織上缺クヘカラサル要素ニシテ其ノ飼育ノ多少ハ農業ノ盛衰ニ重大ナル關係アルノミナラス輸移出品中頗ル重要ノ位置ヲ占ムルモノナルヲ以テ其ノ改良増殖ハ一日モ忽ニス可ラサルナリ

從來朝鮮ノ農民ハ畜牛ヲ愛養シ風土亦之カ飼育ニ適スルヲ以テ育牛業ハ他ノ産業ニ比シ比較的進歩

ノ蹟ヲ觀ルト雖尙其ノ改良増殖上力ヲ用ウヘキ點  
尠カラス乃チ蕃殖上種牛ノ選擇ニ重キヲ置カサル  
カ如キ又野草ノ保護及芻草ノ貯藏ニ意ヲ用井サル  
カ如キ又ハ獸疫ノ豫防ヲ講セスシテ多數ノ畜牛ヲ  
失ヒシカ如キ孰レモ畜牛ノ増殖ヲ妨ケ且其ノ體格  
ヲ劣變セシムルノ原因ナラサルハナシ加之近年内  
地及外國ニ多數優良ナル畜牛ヲ輸移出シ將來益増  
加セムトスル趨勢ナルカ故ニ今ニ於テ改良増殖ノ  
途ヲ講セスンハ朝鮮牛ハ漸チ以テ劣變減少シ内ハ  
農業經濟上外ハ貿易上ニ於テ兩ナカラ其ノ弊ヲ受  
クルニ至ルヘシ曩ニ優良ナル種牛ヲ各地ニ配付シ

種牛ノ保護費及購買費ヲ補助シ又牛疫侵入ノ門戸タル咸鏡北道北部ニ於テ本年ヨリ畜牛ニ豫防注射ヲ行ハシメ著々必要ナル施設ヲ遂行シタルハ皆畜牛ノ改良増殖ヲ圖ラムトスルノ意ニ外ナラサルナリ依テ左記要項ニ據リ懇切ニ農民ヲ指導シ以テ所期ノ成績ヲ舉クルニ努ムヘシ

明治四十五年三月十一日

朝鮮總督 伯爵 寺内正毅

一種牡牛ノ選擇 畜牛改良上選擇スヘキ種牡牛ハ乳牛ヲ除クノ外先ツ朝鮮在來種ヲ本位トシ可成北  
部産ノ優良ナルモノヲ採擇スルコト

一種牝牛ノ配置及種付　畜牛ヲ改良セムニハ優良ナル種牝牛ヲ備ヘ其ノ種付ヲ行フニアリ依テ道白ヲ種牝牛ヲ飼養スルカ或ハ篤農家ニ貸付飼養セシメ適當ナル管理ノ下ニ巡回種付ヲ行ヒ又ハ附近ノ牝牛ニ種付セシムルコト

一種牝牛ノ保護　從來體格完全ナル牝牛アルモ特ニ之ヲ種牛トシテ使用スル慣行ナシ是レ牛種ノ劣變ヲ來セル原因ノ一ナリ故ニ種牝牛普ク配置セラレサル間ハ各地方ニ於テ優良ナル牝牛ヲ選抜シ其ノ所有者ニ若干ノ飼養料ヲ補助スルカ又ハ他ニ便宜ノ方法ヲ講シ一定ノ期間之ヲ其ノ地ニ保留シテ



種付ニ供セシメ以テ漸次種牛尊重ノ良習ヲ馴致セシムルコト

一 牝牛ノ貸付　　畜牛ノ増殖ヲ圖ラムカ爲ニハ牝牛ヲ飼養スル者ヲ多數ナラシメサルヘカラス故ニ畜牛ヲ所有セサル農民ニ牝牛ヲ貸付シ以テ蕃殖用ニ供セシムルコト

一 畜牛預託ノ獎勵　　小農ハ畜牛ヲ購入スル資力ナキニ依リ農繁ノ期ニ入ルトキハ不廉ナル料金を支出シテ他人ヨリ畜牛ヲ賃借スル状態ナルヲ以テ資産者ハ利殖ノ方法トシテ畜牛ノ預託ヲ爲ス慣習各地ニ行ハル此ノ良慣習ヲ誘掖利導スルトキハ能ク

畜牛ノ數ヲ増加シ得ヘキニ依リ畜牛ノ預託ヲ爲ス者ニハ地方金融機關ヲシテ可成低利ノ資金ヲ融通シテ預託牛購買ノ資金ニ充ツルヲ得セシムルコト

一 飼料ノ供給　畜牛ノ主要ナル飼料ハ野草ナリ然ルニ多年草生地ノ保護ヲ等閑ニ付シタル結果徃々野草ノ酷シク衰耗セル地方アルヲ以テ野草ノ保護ニハ周到ナル注意ヲ拂ハシムル様人民ヲ誘導スルト同時ニ牧草ノ栽培ヲ試ミ風土ニ適應セル種類ヲ普及セシメ又夏季青草ヲ刈取り乾燥貯藏シテ冬季ノ飼料ニ充テシムルコト

一去勢ノ獎勵　去勢ハ牡牛ノ性質ヲ溫順ニシ生長

ヲ速カニシ肉質ヲ良好ナラシメ體質ヲ肥臚セシムルノミナラス又劣悪ナル牝牛ヲ種付ニ使用セシメサルノ利アリ依テ先ツ農民ニ勸誘シテ去勢ノ効益ヲ周知セシメタル後漸次技術者ヲシテ種付ニ適セサル牝牛ノ去勢ヲ行ハシムルコト

一 妊牛屠殺ノ取締　　妊牛ヲ屠殺シテ食用ニ供スル

風習ハ畜牛ノ増殖ヲ妨ケ經濟上不利益尠カラス依テ分娩期ニ近キタル牝牛ニ對シテハ暫ク屠殺ヲ延期セシメ又牝犢ハ可成屠殺セシメサル様注意スルコト

一 獸疫ノ豫防

獸疫ハ畜牛ノ蕃殖ヲ阻碍スルコト

大ナリ就中牛疫ノ流行ニ因リ生スル禍害ハ最劇烈ナルヲ以テ周到嚴密ナル豫防制遏ノ方法ヲ執ルヲ要ス又炭疽ハ隨時各地ニ散發シ其ノ死亡率ノ多キ牛疫ニ劣ラサルモノアルヲ以テ其ノ發生地ニ於テハ嚴重ニ消毒ヲ勵行シ再發ヲ防クハ勿論其ノ頻發スル地方ニハ豫防接種ヲ施行シテ之ヲ未發ニ防止スハク其ノ他ノ獸疫ノ豫防ニ就テモ機宜ノ措置ヲ執ルコト

附

錄

豚、

鷄、

羊

# 豚

豚は繁殖力が非常に旺盛で、一産六頭から八頭位は普通で多きは十頭以上も産こともある、其の上年二回分娩せしむることが出来るから之れが飼養は實に有利な仕事である、豚は本来早熟で生後一歳になれば繁殖に適するばかりでなく、肥育の性に富んで居るもので一歳になれば屠殺して肉用となる、斯く資本の融通が敏活に行はるゝのは他に多く比類がない、隨て資本に乏しいものでも容易に飼養することが出来る。

豚は土地を選ばず、低地にも、高地にも、平地にも飼料さへ充分なれば、飼養することが出来る。

豚の肉は食用に供し其脂肪は薬用にも料理用にも珍重せられ、内臓、

の中、腸の様な詰らないものでも腸詰用となり、其の外肝臓、心臓、腎臓、胃、膀胱等一として棄つるものはない、殊に腿や胴は燻肉とし或は鹽肉として貯藏に適し、毛は刷毛となり、骨は夫れく利用の途があつて、屠殺後の用途は到底他の家畜の及ぶ所でない、乍併生存中は繁殖用の豚を除けば肥料を得る外別に收利の途はない、故に飼料は可成廉價で不斷多分に得らるゝものを選ばなければ收支償はざる場合がある、夫れで先づ幾何の飼料で幾何の利益を收め得るかを充分に研究した上に飼養するかせぬかを決定するが宜しい、返すくも養豚の成功する否とは實に其根本が飼料であることを忘れてはならぬ。

朝鮮の豚を支那の豚と比較すれば支那の豚は體格も丈夫で肉付も良

いが朝鮮豚は倭小で發育が不完全で肥育性に乏しい、之れといふのは長い間飼養管理及繁殖が粗放であつた爲に、遂に今日の様に成り果てたのである、在來の豚は、能く粗食に耐へ又繁殖力が強く優點もあるから、此性を利用して漸次改良したならば、朝鮮に適する良い豚を生産する様になることは決して困難でない、然らば之を改良するのにはどんな種類が良いかといふに先づ「バークシャー」か「ヨークシャー」の様な種類を選ぶのが適當で、體格の上から云つても在來種が黒色である上から見ても、又飼料の關係から考へても、只今の處では「バークシャー」の方が優つて居る。

「バークシャー」種は強健で中等の大きさで、胴は長く深く四肢の配置が良く餘り粗野の觀もなく、且つ仔を産むことが多く、其仔豚は強



壯で成熟期が早く十二箇月位で多量に佳良の肉を産するものである

「パークシャー」種豚の標準體格

毛色 全體は黒色にして四肢端、顔面及尾の尖端には白斑がある

頭及頸 鼻は長からず、顔面は稍凹み、後頭は廣くて突起す、

眼は大きい方で鈍くない、顎はその大さ中等で能く緊りて美しい、

頸の長は中等、耳は直立す。

前軀 肩は圓く滑かで能く緊り背よりも狭い方が良い、胸は廣く

て下の方に廣がつて能く充ちて居る、前肢は相互隔つて其長は中等

で眞直、繋の位置は正しくて強く、骨は大きい方である。

中軀 背は其幅中等で頸から尾までの背線は幾分上の方に穹隆す

腰部は強く且つ緊りて不正に穹隆してはならぬ、肋は長く且つ充分

に穹隆す、胴は深く長くて、肩と腿との間に工合よく真直に位す、胸圍は能く充ちて、前肢と肩胛部との接着が宜しい、膝は充ちて低いのが良い、胸腹下は整然として直ぐなのがよい。

後軀 臀の廣は背と同様であつて直ぐで、尾部まで丸味がある、腿は柔軟でなく、筋肉が充實して飛節以下は小さい、後肢は相互に隔りその長さは中等で真直で、繋の位置が正しくて強く、骨は大きな方で趾は緊り歩行に際して廣がつてはならぬ、尾は背線に沿ふて附着し尾房は白い。

品位 耳は其大さ中等厚さは寧ろ薄い方で緊つて居る、毛は光澤があつて美しく、皮膚は滑かで襞がなく、脚の骨は美しく鼻と頸は優美で、胴や肩に突起がなく、筋肉は充實して撓軟、頸部や前膝部

や腹部や腿部は孰れも弛緩してはならぬ。

姿勢 舉動活潑、歩行確實、繫は能く體を支へて居る。

體の狭きもの、脂肪の附き過ぎたもの、體が廣過ぎて背が弛る  
みたもの、頸が厚くて穹隆したもの、分婉せざるもので腹部が  
著しく膨れて弛んだもの、胸が狭くて肩が重きもの、鬣が多く  
て皮膚が滑かでないもの、脚が不恰好で均合悪しきもの、大き  
な厚い垂れた耳をもつものは、縦し純粹種であつても種豚にし  
てはならぬ。

種類の選擇は勿論必要ではあるけれども、飼養管理が不完全である  
ご何んな種類でもその形質を維持することは出来ぬものである、  
夫れで飼養管理の巧拙は、種類の選擇よりも一層重要である。

豚を改良する初めには、先づ純粹種の牡を求め之れを在來の豚に配合するのである、而して之から得た仔豚の中より劣等なるのを年々淘汰すれば、漸次改良されて利益を増加することが出来る、

豚の改良には必ず純粹の牡を要するもので、種豚となるべきものは良い形態を具へ且つ其性質が温和でなくてはならぬ、純粹繁殖の場合、牡豚は牝豚に較べると一層大切なものであるから注意して選ばねばならぬ。

前述の如く豚は良い牡で漸次改良が出来るけれども、最良の結果を得んとするには、優良な牝豚を要することは勿論である其の選擇の要點は牡豚と略々同様であるけれども、體軀の構造が優美で性質は更に温和で、母としては育児の良性を持つたものでな

くてはならぬ、尙ほ繁殖用の牝豚を選ぶには左の諸點に注意せねばならぬ。

一、乳頭の數が多ければ多い程繁殖力が強い、則ち良い牝豚は普通十個から十二個の善く發育した乳頭を持つて居る。

一、繁殖力の多少は概して遺傳性であるから、一産多生の仔豚の中から選ぶがよい、將來最も有望な豚は、同腹の仔豚中最強壯で母の乳房の最も前方の乳頭から哺乳するものである何となれば前方の乳頭は、後方の乳頭よりも多量の乳汁を分泌するからである、夫れで繁殖用を選定するのは、必ず仔が母の乳汁を哺する時にも注意せねばならぬ。

一、豚は種類によつて多少の差はあるが、牝の繁殖適齡は生後

満一歳である少くも八個月を経たものでなければならぬ若し出來得るならば一年二個月位で種付すれば更に妙である、餘り幼きものを繁殖に供すれば母仔共に發育が不完全で其結果が宜しくない牝豚の發情は四季に起るもので、凡そ三十時間から四十時間繼續するから發情後十二、三時間のとき種付するが良い、發情の兆候は、食慾が遽かに減じて不穩となり、繁殖器官が充血して赤くなり、聲を擧げて牡を慕ふものである、若し種付しても受胎せぬときは、發情が十二、三日乃至二十一日毎に反覆するのが普通であるから受胎の有無は此時に注意すれば判定することが容易である。

牡豚も牝と等しく一歳になれば繁殖用に供するけれども其最も適當な年齢は二、三歳の頃である、五、六歳になると肥満して情慾が缺

乏し其結果が満足でないから、寧ろ屠りて肉用に供するのが一般の通則である。

牡豚に對する牝の配合數は初年には二、三十頭位、二、三歳では三、四十頭位が適度であるが、體力の強弱、營養の狀態等によりて多少斟酌せねばならぬ。

豚は繁殖期に近づく以前より牝牡を隔離して別々に飼養するがよい。大規模に豚を繁殖せむるときは、營養率を定めて飼料を給與するのが利益であるけれども、小規模に農家の副業として繁殖せしむるには専ら經濟を基礎として廢物若くは廉價の飼料を選びて飼養する外はない、斯る場合には常に營養狀態を觀察して、飼料を加減することが最も肝要である。

仔豚は離乳期から繁殖期に達する迄は、特に注意して飼養せねばならぬ、離乳前後より幼豚に與ふる飼料は消化が容易で營養分の多いものがよい、離乳を急ぐ場合に殊に左様である、營養分の多い母乳で養はれたものが、遽かに不良の飼料に移つるときは、其發育を中止するから逐日少量づゝ濃厚の飼料を遞加して遂に全く離乳する様にせねばならぬ、若し此時期に於て飼養法を誤つたならば、豚は遂に完全な發育をなさないものである、繁殖用に供しないで單に肉用として屠殺するものには、消化を害しない限り、可成多量の飼料を與へるが良いけれども流動する飼料が餘り多いと幼豚は充分に食はない様になり、又單味の飼料を毎日〳〵引續き長く與へるときは、營養の調和が出来なくなる。



繁殖用に供する仔豚の發育の益んなものには、脂肪分に富める飼料が過ぎてはならぬ、又肉用の豚の様に多數一室に群居せしめてはな

らぬ。

飼料は如何なる種類のものでも、適當の蛋白質を含んだものでなければ豚は完全に發育しない、豚の飼料は柔軟で、半流動體であるから全部均一に混合することが肝要である、例へば粥狀飼料中に油粕を混するときには容器の底部に沈澱が出来て上部は稀薄である夫れで何でも飼料は給與前に攪拌するがよい。

妊娠中の豚には穀類其他滋養分の多い飼料に糠等を混じで與ふれば其容積を増し、且つ便通を助くるの効能がある。

適當な飼料で飼養して筋骨が發育した、後に脂肪を附け肉質を改善

するのが肥育法である、肥育の期間は運動を避け初めの間は濃厚な良い飼料で次に體に脂肪の附く様な飼料を與へ、又食鹽は平常よりも少し多量に給するのである。

豚の肥育は生後八個月から一年位が普通であるが離乳後から、直ぐに始めても可いけれども老齡のものは徒らに飼料を多量に要するのみでなく肥育の効能も少ないから適當の時期に肥育することが肝要である。

分娩した豚には體力を恢復するのど、乳汁を分泌するのに必要な濃厚飼料の多量を與へねばならぬ、少なくとも離乳迄は良い飼料を持続するの必要がある。

妊娠した豚には過冷、不消化其他有害の飼料を避け、衝突、滑倒又

は物に驚かぬ様特に注意して飼養せねばならぬ、健康なものは分娩に際して甚だしき困難がない又妊娠した豚は舍内に收容し分娩表で平均百十六日(長きは百二十日)の分娩時を調べ分娩期に近づけば舍内を清潔にして諸般の準備を整へ置くが良い、母の乳房が膨れて乳頭から乳汁を搾り取らるゝ様になれば二十四時間以内に分娩するのである分娩を終らば十五分乃至三十分位で娩隨が下るから直ちに取り去つて決して母豚に食はせてはならぬ、若し其味を覺ゆれば自分の仔までも食い盡すことがあるから注意が肝要である、敷藁は新鮮で乾燥した清潔なものを用ひねばならぬ、仔豚は寒氣に弱いから嚴寒の候には分娩しない様に種付するのが得策である、母豚は可成安靜にし分娩後二十四時間以内は僅少の飼料を與へるが

良い初めは水のみで次に少量の流動粥状の糲を與へ五日位まで  
 漸次少量づゝ増加して後充分の飼料を給するがよい。

### 分娩早見表

種付月次	種付月次		種付月次		種付月次		種付月次		種付月次	
	種付月次	種付月次	種付月次	種付月次	種付月次	種付月次	種付月次	種付月次	種付月次	種付月次
一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一
一二	一三	一四	一五	一六	一七	一八	一九	二〇	二一	二二
二三	二四	二五	二六	二七	二八	二九	三〇	三一	三二	三三
三四	三五	三六	三七	三八	三九	四〇	四一	四二	四三	四四
四五	四六	四七	四八	四九	五〇	五一	五二	五三	五四	五五
五六	五七	五八	五九	六〇	六一	六二	六三	六四	六五	六六
六七	六八	六九	七〇	七一	七二	七三	七四	七五	七六	七七
七八	七九	八〇	八一	八二	八三	八四	八五	八六	八七	八八
八九	九〇	九一	九二	九三	九四	九五	九六	九七	九八	九九
一〇〇	一〇一	一〇二	一〇三	一〇四	一〇五	一〇六	一〇七	一〇八	一〇九	一一〇
一一一	一一二	一一三	一一四	一一五	一一六	一一七	一一八	一一九	一二〇	一二一
一二二	一二三	一二四	一二五	一二六	一二七	一二八	一二九	一三〇	一三一	一三二
一三三	一三四	一三五	一三六	一三七	一三八	一三九	一四〇	一四一	一四二	一四三
一四四	一四五	一四六	一四七	一四八	一四九	一五〇	一五一	一五二	一五三	一五四
一五五	一五六	一五七	一五八	一五九	一六〇	一六一	一六二	一六三	一六四	一六五
一六六	一六七	一六八	一六九	一七〇	一七一	一七二	一七三	一七四	一七五	一七六
一七七	一七八	一七九	一八〇	一八一	一八二	一八三	一八四	一八五	一八六	一八七
一八八	一八九	一九〇	一九一	一九二	一九三	一九四	一九五	一九六	一九七	一九八
一九九	二〇〇	二〇一	二〇二	二〇三	二〇四	二〇五	二〇六	二〇七	二〇八	二〇九
二一〇	二一一	二一二	二一三	二一四	二一五	二一六	二一七	二一八	二一九	二二〇
二二一	二二二	二二三	二二四	二二五	二二六	二二七	二二八	二二九	二三〇	二三一
二三二	二三三	二三四	二三五	二三六	二三七	二三八	二三九	二四〇	二四一	二四二
二四三	二四四	二四五	二四六	二四七	二四八	二四九	二五〇	二五一	二五二	二五三
二五四	二五五	二五六	二五七	二五八	二五九	二六〇	二六一	二六二	二六三	二六四
二六五	二六六	二六七	二六八	二六九	二七〇	二七一	二七二	二七三	二七四	二七五
二七六	二七七	二七八	二七九	二八〇	二八一	二八二	二八三	二八四	二八五	二八六
二八七	二八八	二八九	二九〇	二九一	二九二	二九三	二九四	二九五	二九六	二九七
二九八	二九九	三〇〇	三〇一	三〇二	三〇三	三〇四	三〇五	三〇六	三〇七	三〇八
三〇九	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇

豚

種付月次 分帳月日	十二月	十一月	十月	九月	八月	七月	六月
	二六	二四	二四	二五	二四	三三	二四
一	二七	二五	二五	二六	二五	二五	二五
二	二八	二六	二六	二七	二六	二六	二六
三	二九	二七	二七	二八	二七	二七	二七
四	三〇	二八	二八	二九	二八	二八	二八
五	三〇	二九	二九	三〇	二九	二九	二九
六	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇
七	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇
八	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇
九	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇
一〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇
一一	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇
一二	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇
一三	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇
一四	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇
一五	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇
一六	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇
一七	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇
一八	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇
一九	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇
二〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇
二一	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇
二二	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇
二三	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇
二四	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇
二五	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇
二六	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇
二七	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇
二八	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇
二九	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇
三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇

仔豚は普通四週乃至六週で離乳することが出来るけれども、發育を

完全にしようと思へば八週位が宜しい十週乃至十二週で離乳するのは、年に唯一回分娩せしむる場合に行ふ法である離乳期になつても發育が不良な仔豚は母と同棲せしむるがよい、發育の佳良な仔豚で能く飼料に移つたならば、少し位は早く離乳するも差支はない、母豚の乳量は仔豚の成長と共に漸次減少するから、弱いものゝみ母豚に附けて置けば良い、若し事情が容すならば、離乳するときは、先づ隔離して置いて三、四日間位毎日一回母豚の所につれ行き哺乳せしめ、その終るを待ち隔離するのが安全である、此方法は又母豚の乳房に起り易い故障をも防ぐことが出来る。

如何なる場合でも仔豚は離乳前能く飼料に慣れしめ、他の豚舎に收容して營養分に富んだ飼料を給するのである、又食器は凡て清淨に

せねばならぬ、此時期に於て最も注意を要するのは、飼料の全部を仔豚が食ひ盡し得る様に一日三回か四回に分ち與へるのである則ち多量に過ぎて飼槽に餘分の飼料が残らぬやうにせねばならぬことである。

豚舎は豚の頭數及農家の事情で一樣には行かぬけれども、乾燥の場所を選び、夏季涼しく、冬暖で賊風を防ぐことの出来る設備がなくてはならぬ、濕潤な床は種々の障礙があるから、寢る所丈は可成板張にするが良い、豚の室は不潔に成り易いから常に清潔に掃除せねばならぬ。

豚の管理は他の家畜に比すれば手数が少なくて且つ容易である、豚舎の清潔法と飼料の給與が其主なるものである、豚舎は可成毎日掃除

するがよい、夏は若し便宜があれば時々洗うてやるがよい、又敷藁を多量にして寒胃を防がねばならぬ。

繁殖用に供せない豚は肉用であるから、生後四週乃至五週位では非去勢せねばならぬ、去勢は甚だ單簡で朝鮮の各地で行はれて居る方法で別に差支がない。

豚 虱は幼豚發育不良の最も普通な原因の一である、又多數寄生すれば、成長した豚でも肥育を妨げられ、妊娠も種豚も之れが爲めに衰へることが多い此の如く虱は何れの豚にも有害なものであるから、若し發見したならば、速に驅除せねばならぬ、夫れで豚舎は折々洗淨し石灰乳等で消毒し敷藁は新鮮で清潔な乾いたものを用ゝるがよい、不潔な敷藁等は豚舎や運動場等に決して堆積してはなら



ぬ。

新あらたに收容いれるする豚ぶたは病毒びやうき其他そのほか寄生蟲けしちゅう等を傳播うつすすることが多いから初めはじめに微温ぬるいの「コールタール」溶液ようえき(二%)で洗あらひ、十日かから乃至二週しゅうの後再のちまたび此こ法しつたを繰返くりかへすときは此この虞おそれがない、其他そのほか虱しらみには石油せきゆと機械油きがいあぶらとの等分とうぶん又「テレピン」油ゆの一分ぶと機械油きがいあぶらの二分ぶ等なせも亦効力またきりめがある稀釋うすめせざる石油せきを妊豚はらんだぶたに用もちふれば、流産りうさんを起おこすことがあるから注意ちゅういせねばならぬ

内臟蟲ないぞうちゅう 内臟蟲ないぞうちゅうは屢々しばしば成長中せいちょうちゅうの幼豚こぶたに寄生やせるするものであつて、飼養管理かうようかんりの不行届ふかゆきとどきから來くるものである、即ち豚舎すんは及運動場およびうんどうばしきわらなせ敷糞等ふかの不潔けつが其原因そのもとである。

豚ぶたは衰弱よわして布袋腹ほていばらとなり、關節かしくが弱よわく體軀からだが倭小ちひさで著ちやうしく營養えいようの障害せうがいを來きたし、完全くわんぜんの發育はついくを遂たげることが出來でぬ甚はなはだしいものにな

ると死ぬるものもある。

内臓蟲の中で最も多いのは、蛔蟲で其他大鈎頭蟲、腎虫、肺臓蟲等がある、之れを驅除するには「テレピン」油が良い、豚の體量約八十斤毎に三「グラム」か四「グラム」宛三日間毎朝飼料に混じて與へると効能がある。

下痢 哺乳中の豚が下痢するのは概して母豚の乳汁が不良であるからである、母豚に斯る異狀を來すのは、産後脂肪質に富んだ飼料の過食、濃厚に過ぎた飼料過食等に基づくことが多い尙ほ或は飼料の急變、酸敗の飼料、不潔の飼槽等に原因することもある、故によく注意して之を改善せねばならぬ。

下痢を治療するには、朝夕母豚の飼料中に綠禁の少量か若くは石灰

水を混すれば早効がある、如何なる場合でも、充分に飼料に注意し豚舎は乾燥で日當り能く、且つ空気の流通を完全にするのが肝要である。

便秘、便秘は、屢々妊娠に起るもので、運動の不足や飼料の濃厚に過ぎた場合に多いから、適度の運動をなさしめ、適當の飼料を與へると治すことが出来る、稍々頑固なものには、亞麻仁油を飼料に混じで與ふれば良い。

尙健病 屢々幼豚に起る疾病で、諸關節及肋骨を冒すものである其原因は主に礦物質飼料が不足で、植物質飼料の過ぎたもの、運動の不足、酸性飼料の持久、光線不足の豚舎、不潔卑濕の豚舎等であるから充分衛生に注意し、健康な豚を選んで繁殖用に供し、時々他

の豚ぶたを入れてい血液けつゑきの更新いれかを計はかるが良よい。

豚

## 鶏

朝鮮では、鶏は古くから盛んに飼養されたものである、されば氣候

風土の能く養雞に適して居ることは明らかである。

右の様なるに係らず朝鮮ではその改良に注意しなかつた爲め在來種

は肉の量も卵の數も著しく劣つて居る故に適當な種類を選んで實用

雞の飼養に務め收益多い農家の副業を益々増進せしめねばならぬ、

改良された雞の中には、肉用又は卵用として、各々優れた効能の

ある種類があるけれども、今日の朝鮮農家の經濟状態では、其特能

を充分に發揮せしむることは困難な場合が多いから特に保護を與へ

なくても朝鮮の氣候風土に適應して、飼養が容易で利益の多い「プ

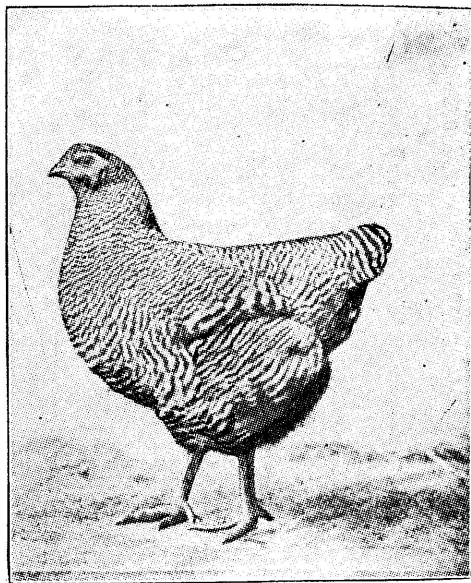
リマスロツク」種や名古屋「コーチン」種などの卵肉兼用種を選ぶの

が得策である、又卵用種としては白色「レグホーン」種が宜しい。

「ブリマスロツク」種は體貌が奇麗で實用で氣候に對する抵抗力が強く卵が淡褐で大きく其數も多く又肉質は柔軟多汁で味が良く且早熟の性に富んで肥育が容易である又雌は孵卵が巧で雛の發育が良い、其體格は次の通りである。

頭は中等大で高く、嘴は黄色その長さ中等にて厚く強く、眼は大きく輝て瞳は赤褐色である、冠は單冠、中等大で直立して居る、顔は滑かで紅色、耳朵は能く發育して懸垂し、肉髯は稍々長い、頸は長く羽毛が密生し、背から均合よく穹隆して居る、體は大きく深く、方形で緊つて、胸は廣く深く圓味がある、背は廣くて短かい、羽は中等大である、尾は稍長くその支持は相當に高く美麗である、

脚は能く隔れ、脛は強く可なり長く、黄色で羽毛がない、趾は四個あつて強く直い、姿勢は直立して、高尚で羽毛は伏生其色は全部均



一である、體量は

充分成長したもの

で一貫乃至一貫四

百匁羽毛は灰白

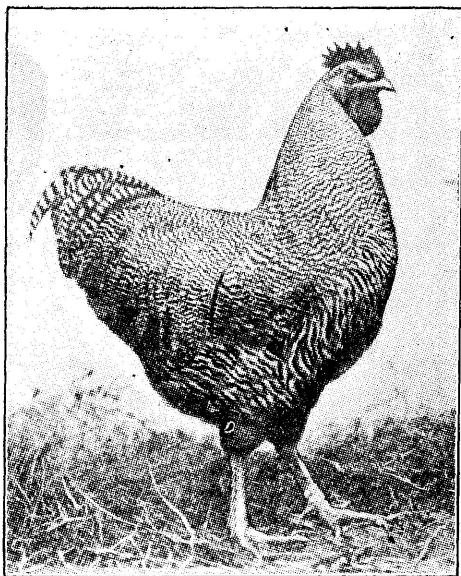
色の地色に灰黒

色の横斑があるか

ら、横斑又は漣浪

「ブリマスロット

ク」と云つて居る、



「コーチン」種しゆに似て、體格からだやう稍小ちひさく、性質せいしつが溫和おとなしくで、柵飼さくがいにも適てきす、且かつ粗食そしょくに堪たゆる性質たちである、體からだは強健つよくで、體量めがたは雄をすが一貫二百くわんにふひゃく、雌めすは八

近來ちかごろ右みぎの外ほかに白色しろいろ、淡黄色うすきいろ等なごもある、雌めすは頭かしら及および頸びくびが小ち、さく胸むねは低ひくく、姿し勢せいは方形しかくで、體量めがたは九百三、四十もんめ、ある。

名古屋なごや「コーチン」

種しゆは一見みた「バフコ



百<sup>も</sup>多<sup>ん</sup>位<sup>くら</sup>、卵<sup>たまご</sup>は<sup>おほ</sup>大<sup>おほ</sup>き<sup>おほ</sup>く<sup>おほ</sup>殻<sup>から</sup>は<sup>うす</sup>淡<sup>うす</sup>褐<sup>い</sup>で<sup>いら</sup>産<sup>たまご</sup>卵<sup>をうむ</sup>の<sup>たまご</sup>數<sup>かず</sup>も<sup>すく</sup>少<sup>すく</sup>ない<sup>すく</sup>方<sup>ほう</sup>では<sup>ない</sup>ない<sup>ほう</sup>

又<sup>また</sup>た<sup>たまご</sup>ま<sup>かへ</sup>す<sup>こと</sup>こ<sup>ひな</sup>を<sup>そだ</sup>て<sup>てる</sup>こ<sup>こ</sup>が<sup>たく</sup>巧<sup>み</sup>で<sup>ひな</sup>雛<sup>はつう</sup>の<sup>く</sup>發<sup>はつう</sup>育<sup>く</sup>が<sup>よ</sup>良<sup>い</sup>い。

白<sup>はく</sup>色<sup>しよく</sup>「レ<sup>れい</sup>グ<sup>ぐ</sup>ホ<sup>ほ</sup>ー<sup>おん</sup>」種<sup>しゆ</sup>は<sup>からだ</sup>體<sup>ちゆう</sup>は<sup>ちゆう</sup>中<sup>ちゆう</sup>等<sup>おほ</sup>大<sup>おほ</sup>で<sup>おほ</sup>羽<sup>は</sup>毛<sup>ね</sup>は<sup>ゆ</sup>雪<sup>ゆ</sup>白<sup>き</sup>で<sup>ある</sup>から<sup>さ</sup>頗<sup>すこ</sup>る<sup>ぶ</sup>美<sup>び</sup>

麗<sup>れい</sup>である<sup>せい</sup>性<sup>せい</sup>質<sup>しつ</sup>は<sup>くわ</sup>活<sup>くわ</sup>潑<sup>つ</sup>で<sup>は</sup>羽<sup>は</sup>力<sup>ちから</sup>強<sup>ちゆう</sup>く<sup>ちゆう</sup>能<sup>よく</sup>く<sup>よく</sup>害<sup>がい</sup>敵<sup>てき</sup>の<sup>せ</sup>襲<sup>め</sup>撃<sup>げ</sup>を<sup>ま</sup>免<sup>ねが</sup>る<sup>ゆ</sup>故<sup>ゆ</sup>最<sup>ちゆう</sup>も<sup>さ</sup>放<sup>はな</sup>飼<sup>がひ</sup>

に<sup>て</sup>適<sup>てき</sup>する<sup>ひな</sup>、雛<sup>ひな</sup>は<sup>そだ</sup>發<sup>ちゆう</sup>育<sup>く</sup>極<sup>きく</sup>め<sup>て</sup>善<sup>よ</sup>く<sup>よ</sup>疾<sup>やま</sup>病<sup>まい</sup>尠<sup>すく</sup>し<sup>な</sup>卵<sup>か</sup>化<sup>へり</sup>後<sup>て</sup>五<sup>ご</sup>箇<sup>げつ</sup>月<sup>げつ</sup>で<sup>産</sup>卵<sup>さんらん</sup>を<sup>始</sup>む<sup>はじ</sup>

る<sup>を</sup>、雄<sup>おとこ</sup>の<sup>さか</sup>冠<sup>かん</sup>は<sup>たん</sup>單<sup>たん</sup>冠<sup>くわん</sup>で<sup>を</sup>大<sup>おほ</sup>き<sup>おほ</sup>く<sup>おほ</sup>鋸<sup>のこ</sup>齒<sup>ぎりの</sup>狀<sup>は</sup>の<sup>さ</sup>缺<sup>さけ</sup>裂<sup>り</sup>が<sup>あり</sup>て<sup>か</sup>頭<sup>かしら</sup>上<sup>のうへ</sup>に<sup>た</sup>直<sup>た</sup>立<sup>た</sup>し<sup>て</sup>、

雌<sup>めす</sup>の<sup>さか</sup>冠<sup>かん</sup>は<sup>かた</sup>片<sup>かた</sup>側<sup>がわ</sup>に<sup>た</sup>倒<sup>た</sup>れる<sup>か</sup>顔<sup>かほ</sup>面<sup>めん</sup>は<sup>あか</sup>紅<sup>かう</sup>色<sup>いろ</sup>で<sup>み</sup>耳<sup>み</sup>朶<sup>たぶ</sup>は<sup>しろ</sup>白<sup>いろ</sup>色<sup>いろ</sup>で<sup>にく</sup>肉<sup>にく</sup>髻<sup>たれ</sup>は<sup>なが</sup>長<sup>なが</sup>く<sup>あか</sup>赤<sup>あか</sup>く<sup>むね</sup>胸<sup>むね</sup>

は<sup>よ</sup>良<sup>ま</sup>く<sup>ま</sup>彎<sup>ま</sup>出<sup>り</sup>し<sup>て</sup>頸<sup>くび</sup>は<sup>なが</sup>長<sup>なが</sup>く<sup>を</sup>雄<sup>おとこ</sup>には<sup>なが</sup>長<sup>なが</sup>い<sup>な</sup>謠<sup>な</sup>羽<sup>き</sup>が<sup>ある</sup>、嘴<sup>くちばし</sup>は<sup>き</sup>黃<sup>き</sup>色<sup>いろ</sup>で<sup>すね</sup>脛<sup>すね</sup>は<sup>は</sup>羽<sup>は</sup>毛<sup>ね</sup>

なく<sup>き</sup>黃<sup>いろ</sup>色<sup>いろ</sup>で<sup>を</sup>、雄<sup>おとこ</sup>の<sup>め</sup>體<sup>め</sup>量<sup>かた</sup>は<sup>七</sup>七<sup>ひゃく</sup>多<sup>ふ</sup>から<sup>九</sup>九<sup>ひゃく</sup>多<sup>ふ</sup>雌<sup>めす</sup>は<sup>五</sup>五<sup>ひゃく</sup>多<sup>ふ</sup>から<sup>八</sup>八<sup>ひゃく</sup>多<sup>ふ</sup>一<sup>ち</sup>

年<sup>ねん</sup>の<sup>さん</sup>産<sup>さん</sup>卵<sup>らん</sup>數<sup>すう</sup>は<sup>百</sup>百<sup>ひゃく</sup>十<sup>じゅう</sup>個<sup>こ</sup>から<sup>二</sup>二<sup>ひゃく</sup>百<sup>ひゃく</sup>個<sup>こ</sup>卵<sup>たまご</sup>殼<sup>から</sup>は<sup>しろ</sup>白<sup>いろ</sup>色<sup>いろ</sup>で<sup>め</sup>重<sup>め</sup>量<sup>かた</sup>は<sup>十</sup>十<sup>ろく</sup>多<sup>ふ</sup>から<sup>一</sup>一<sup>ひゃく</sup>多<sup>ふ</sup>一<sup>ち</sup>

二十<sup>にじゅう</sup>多<sup>ふ</sup>内<sup>うち</sup>外<sup>ぐわい</sup>あり<sup>て</sup>實<sup>じつ</sup>用<sup>よう</sup>雞<sup>けい</sup>と<sup>して</sup>好<sup>よ</sup>評<sup>ひやう</sup>で<sup>ある</sup>。

雛ひなを育そだてるのに、最もつとも良い時期じきは、春はる三、四月がつの頃ころであるけれど、  
も、六月ごわつの半頃なかば迄ころまでは、差支さしつかへがない、秋あきの季節きせつは春はるよりも、困難こんなんであ  
る。

孵化たかよう用の卵たまごはよく注意ちゆういして撰せんばねばならぬ、形かたちの非常ひじょうに長いながものや  
卵殼からの粗糙ざらなものや、著いちぢるしく尖とがつたもの等は凡まづて種卵たねたまごに適てきせぬもの  
である。

氷點ひょうてん(即すなはち華氏くわしの三十二度さんじふにど攝氏せつしの零度れいど)以下いひかに曝さらされた卵たまごや、雞にはの一  
夜抱やだいた卵たまごを取り出だして半日はんじちも空氣くうきに曝さらしたものは共ともに生活力いきるちからを失うしな  
い孵化ひへらしない。

卵たまごは新鮮あたらしくにして十日いっぴち以内いんない(少すくくも二週しゅうい以内いんない)のものを撰せんみ、形良かたちよき滑なめら  
かなものでなくてはならぬ。

卵を貯ふるには暗い静かな場所、華氏四十度から六十度の温度に保つが可い、卵は空気の流通する様に粗糠か穀を入れた箱の内に大きな端を下にして立つるか、又は籠に入れて布片の覆をなし置くがよい。

精力の衰へた親鶏から健全な卵は得られぬから、種鶏は充分健康に飼養せねばならぬ、此目的を完ふするには放飼が必要で、且つ良い食餌を與へることが肝要である、鶏は雄一羽に雌六羽から八羽位つけて宜しい、繁殖用に最も適當な年齢は二歳から四歳である、孵化用に供する母鶏は餘り年を取らないもので性質の溫和なものが良い卵の大小と季節にも依るが、普通一腹十個内外抱かせるが適當である。

巢は地面に置き稍暗き静かな處で、雨、風や害敵を防ぎ其近くに食餌と水を給し外に砂浴場があれば充分である、熱心に抱卵して採食しないものは、毎朝十五分か二十分位採食と運動の爲め必ず巢から出さなければならぬ、巢にある卵が若しも汚れたならば、微温湯に浸したる清潔な布片を以て拭き取るか可い。

雛は二十一日で孵化するのは強壯なものであるが、二十二日で孵化するものや、卵殻を破つても自ら孵化する力のないものは大概虚弱で、強壯な雛には成らぬ、孵化後雛は一晝夜程は其儘放任し初めて食餌を與へるがよい、食餌を與へるのが早過ぎれば腸が弱くなつて不消化を起して斃るゝものが多い。

雛には一日數回少量づゝ食餌を與ふ、食餌は水分の多い捏餌よりも

却て乾燥したものが可い、水分の多い軟かな食餌は雛の砂囊の働  
が弱くなつて、遂に消化が困難になり下痢を起し易く、且つ食い過  
す虞れがあるから、若し捏飼を、與ふるならば、水が餘り多くない  
様に、特に注意せねばならぬ、又食餌は時々換へるのが、利益であ  
る。

雛十二羽に對しゆで卵一個位の割合で、蔬菜類其他の食餌と混じて  
孵化後三、四日間與ふるが良いけれども、長く續けては宜しくない  
挽き割麥、燕麥、碎米、粟等は撒き餌にすれば雛の運動を増し成育  
を助ける効能がある、食餌は如何なる場合でも決して食ひ餘さぬ様  
に與へなくてはならぬ、雛は可成早く草地に出すが良い、若し氣候  
が良ければ孵化後一週位で放飼に適するものである、放飼場が不充

分で昆虫類が居らぬ處であれば雛の成長を速かならしむる爲めに必要動物質を與へないと衰弱して完全に發育することが出来ぬから廉價の屑肉等が必要である。

雛には孵化後一週間位で清水を與へるけれども多量に過ぎてはならぬ。

放飼の雛は自から適量の砂を啄んで食餌の消化を促がすものである故に舍飼の雛には必ず砂を給與せねばならぬ。

換羽といふのは舊き羽毛が脱けて新羽毛と生へ換はることで其時期を換羽期と稱へて居る、換羽を促進する爲めには能く運動せしめ、又昆虫類がなければ食餌中に屑肉等を混ぜ、卵殻、骨粉、蠣殻、其他向日葵の種等を與ふれば効能がある。

鶏の運動は甚だ必要であるけれども決して雨に濡らしてはならぬ。鶏には動物質の食餌が最も必要である、之れらは廢肉、粉碎した生骨、新鮮な魚類等は適當なもので、柵飼又は繁殖用の鶏に産卵せしむるに最良の結果がある。

廢肉は肉の切り屑、牛の頭、肝臟などで生の儘や煮たものを與ふるものである、若し煮たならば其汁を捏飼に使ふが良い。

生魚は海岸地方や池沼、河川の附近で廉價に得らるゝものを撰ばねばならぬ、繁殖用の鶏には殊に適して居る。

餌料に供する穀類は、地方の便宜と價格に依つて決定するが可い。鶏は柵飼でも放飼でも單一の穀類のみで飼養するよりも、形を變へ品を換へて與ふるときは其成長と能力とに効果があるから、一、

二種に限らず少量づゝ、數種を混合するか又は捏餌と圓粒と交互に與ふるが利益である。

青物で雞の食ふものは何でも大概差支はないが、蔬菜類、根菜類等が良い、一體青物は水分に富んだ食餌で含有せる營養の量は比較的少ないものであるけれども、雞の體の内では他の食餌を緩和する効能がある。

石灰は卵殻を形成するものであるから、産卵時は殊に必要である。夫れで卵殻や蠣殻等を與へねばならぬ、雞が巢にある卵を啄むのは自體に石灰分が缺乏するのを補はんが爲めである。

雞は溫暖の氣候よりも寒冷である時に多量の食餌を要するものである、又冬期は晝夜共に寒さを感せぬ様に防寒の用意をしてやら



ねばならぬ。

冬期間一羽の鶏に對し、粗く碎いた穀類約一握りを撒き與へ、日中捏餌と水とを與へ、夕方埒に入る前に、丸粒の穀類一握りづゝ撒いて與へればよい、捏餌は水を少なくして碎け易く速かに啄み得る様なのがよい、此の外に青物類と動物質とは亦必要である。

農家の鶏舎は普通不完全で當然必要な設備もないのが多いから、鶏の生産力が少ない、若し相當な取扱をすれば必ず之に對する收利があるものである漸次肉と卵の需要が増加するに伴れて實際上の利益と便利とを考へ、注意を拂ふ様にせねばならぬ。

鶏舎の位置の選定はその建築上最も肝要な事である、土地が若し濕地であるならば、他の場所を選むが可いけれども、事情止むを得

ない場合には地より濕氣を受けぬ様に排水して後、日受け能く北、西の冷風の當らぬ所が可い、水に浸る様な凹んだ地には決して建て、はならぬ、壁は乾燥して濕氣を引かぬ材料で床は可成土間よりも地上一、二寸の板張にするが安全である、窓を多くして明るくし太陽の光線を充分に導かねばならぬ、又新鮮な空氣が入り換はるのは甚だ必要であるけれども、隙き間より吹き込む風は宜しくないから、換氣の裝置がない鶏舎ならば毎日窓を開きて風通しをすること、が肝要である、冬期ならば三、四十分位窓を開けば充分であるが、特に寒氣が厳しくて窓を明けて換氣を行ふことが出來ぬ場合は、木の窓掛があれば可い、要するに日夜温度の變化が少ない様にするがよい。

鶏舎は五尺四方の廣さに六羽位の割合でよい、運動場は廣くて草がある所がよい、日覆には樹木を植ゑる必要がある、農家では特に鶏舎を造るのは事情の許さゝることがあるから、適宜軒下等に設備するときでも前記の注意をすれば効果がある。

健康な鶏を繁殖して適當な食餌を與へ、鶏舎の内外を充分に清潔に掃除して置けば疾病は容易に起らぬものである、されど若し發生したならば、貴重な種鶏の外は治療せず速に撲殺して焼却又は深く埋没するが寧ろ得策である。

鶏の下痢 弱虚な親鶏から生産したものの孵化法の宜しくないものが遠き原因で、寒冒や、不良の食餌や水などが近因であるから、食餌を改善し、飲料水に注意し病鶏は直ちに隔離せねばならぬ。

不消化 こなれのりもの 消食器の はら 不調 わるいものや、虚弱 かよわいのち、不適 わるい の食餌 えさ、過食等 くいすぎなど が重なる原

因で、小石の不足 こいし ふそく、捏餌 ねりえ の過食 くひすぎ、蔬菜類 そさいるい の缺乏 けつぱう なども亦疾病 またびようき を起す

もので、鶏は渴 かわき を覺 おぼ へ、食慾 たべもの が少 すく なくなり、下痢 くだり と便秘 べんぴ と交々 こころん／＼ 起り

運動 うんどう を嫌 きら ふ様 やう になる、此病 このやまひ に罹 か れば特に雞舍 せりこや を清潔 きんせい にし乾燥 かわき した食

餌 え を與 あた へ、水 みづ には唐辛 ごうからし を入 い る、がよい。

食卵癖 たまごたべるくせ 狭 せま き雞舍 こや に多 おほ くの雞 にはざり が群集 むらがり する場 ば 合 やい や、運動 うんどう の不足 ふそく や、

明 あか る過 す ぎる巢 す なごが原因 ちんそ である、夫 そ れで群集 ぐんじう する雞 にはざり を別 わ け、運動 うんどう を

促 うなが し、石灰 せっくわい を與 あた へ、巢 す を暗 くら くするがよい、又 また 數 いくつ 個 つ の義卵 にせたまご を置 を けば之

を啄 つひ み漸次 だんじ 此癖 このくせ を止 と むるものである。

ループ にはざり 雞 にはざり は異 へん 様 ごん な聲 こゑ を出 だ し數 すう 日 じつ 立 た ば、口 くち から呼吸 い 吸 き して一 へん 種 な

の臭氣 におひ を放 はな ち、頭 あたま が膨 か ぐれ、眼 め、鼻 はな より不潔 ふけつ な液 しる を流 なが す、此病 このやまひ は傳 うつ 播 つ

力が強く、水飲器から容易く全群に感染し、甚だ危険である、感染したものは速に隔離し、埒巢、鷄舎、飲食器物等凡て消毒せねばならぬ、治療は効果が少いから豫防が肝要である、病雞は殺して傳播を避くるが安全である。

コレラ 危険な傳染病で、多くは斃れるもので、病毒は飲食器物其他鳥類から傳播するものである、雞は食欲がなく、渴を覺え、頭を垂れ熱が高く、眠を促し、冠が蒼白くなつて下痢を起し、糞は初め白く、漸次黄色から綠色になる、「コレラ」は治療しても殆んど無効であるから、豫防が肝要である、若し發病したならば隔離して消毒せねばならぬ。

羽虱 雞の羽虱は血液を吸ふものでないが、羽毛や、皮膚を嚙

み絶えず鋭き爪で皮膚を匍匐するから、強い刺戟が起るのである、多数寄生すれば鶏は疲勞し又た營養の不調が起り無精卵を産んだり産卵数が少なくなつたり其他種々の病を醸し、雛は之れが爲めに斃るゝこともある。

豫防には砂浴が最も有効で夏は舍外に冬は舍内に設け其他舍内の土砂巢内の藁等には石灰を撒くが良い、若し此の害に罹つたならば、除蟲粉と硫黄末とを混じたものや、煙草粉等を皮膚面に撒けば驅除せらる、孵化後母鶏から雛の頭に移つた羽虱には豚脂を塗れば直ぐに殺すことが出来る。

内臟寄生蟲 鶏に寄生する蛔蟲類は、七、八種、絛蟲が八、九種其他有鉤蟲等がある、孰れも害の多いものである、内臟蟲の豫防驅除は

清潔法が最も肝要で糞は毎日掃除して之れに石灰を撒き、雞には「テ  
レピン」油を與ふれば効能がある。

# 羊

朝鮮に散在して居る原野を現状に比して一層有利に使用するには牧羊はその一である、それであるから地方々々で農家の經濟や原野草生の有様などを照合して後に、牧羊の著手如何を決定するがよい、凡て新事業は當初困難なことが多いから、いよいよ開始したならば百折不撓是非成功を期せねばならぬ。

抑々羊を連年同一の牧地に放牧すれば、その地方は漸次衰へて草生が悪くなるから一、二年毎に輪轉して保護せねばならぬ。牧地には乾燥した處がよい、濕氣、低地は忌むべきである、牧地の草は滋養分に富んで、丈の高くない方がよい、又風が多くて塵埃の



立つ様な所は毛質を悪くするからよくない、牧地には清水と日蔭がなくてはならぬ。

良き牧草がなければ優良な羊は飼へぬ、然るに現時の朝鮮の原野の狀態では體質の強健なもの即ち寧ろ毛質は劣つても粗雜の飼養管理に堪ゆるものを選ぶの外はない、將來牧羊の事業が進歩するに従ひ漸次牧地を改良して後亦羊種をも改良するがよい。

牧羊の重なる目的は毛と肉とである、毛用、肉用の選擇は土地の狀況、需要の關係等で各地一様でない、今其の種類によつて異點を述べれば次の通りである。

### 毛用種の體格

總觀 體は厚く幾分圓味を帯び、毛は絹の様に光澤があり、皮膚

は奇麗である。

頭及頸 鼻は廣くて鬃が多い、眼は大きく明がで、顔は天鵝絨の様に鬃があり額は廣く、耳は厚く柔かである、頸は短かくて肩との均合がよい。

前軀 肩は廣くて深く、胸先は廣くて前に廣がり、脚は眞直で短く強く、その間が隔る。

中軀 胸腹は深くて充實し、背は長く水平で、肋は圓味があり、腰は廣くて水平である。

後軀 腰角は廣くて、臀部は廣く長く水平で、脚は眞直で短く強い。

毛 清潔で光澤があり、粗毛が少く綿毛が多く適度に毛脂があつ

て緻密で、相當の長さがあつて強い。

肉用種の體格

總觀 體軀は長く厚く且つ廣く、毛には光澤があつて、皮膚は奇麗で肉量が多い。

頭及頸 鼻孔が濶大で口が大きく唇が薄い、眼は大きく明である、顔は短かくて面縁判然。

前軀 肩は溜かで筋肉が充實、胸先は廣くて前に廣がり、脚は眞直で短く強く、その間は隔る。

中軀 胸腹は廣く深く、背は長く廣く眞直で筋肉が充實し、肋は穹隆して居る、腰は厚く廣く長い。

後軀 腰角は充分廣くて、臀部は長く廣く水平で、腿は廣く深く

肉付がよい、脚は眞直で短く強い。

毛 毛用種に比して一般に毛質が劣り、毛脂も幾分少ないけれど

も、光澤あつて奇麗である。

羊は毛が深くて體温の發散を防ぎ、且つ毛には多くの脂肪が附着して居るから水分の蒸發が少ないので營養分を節約し得る利益がある

毛用の羊は大體牛と殆んど同種の飼料でよい、若し毎日の飼料が不

充分なるときは、體力が衰へて漸次毛の生産に影響するから餘り粗

末な飼料を與へぬ様に注意すべきである、粗硬な草のみで飼養した

もの、毛は光澤に乏しく、よく洗つても灰褐色を帯びて居るから牧

地の草が不良であるならば必ず大麥か燕麥か大豆か藪等を附與せな

ければならぬ。

仔羊はよき飼料で飼養すれば體量を増加することが速であるけれども、若し營養分が不足であつたならば直に衰弱するものである、殊に注意せねばならぬのは離乳の前後である、此時期には美味な飼料を選んで與へねばならぬ、生草のある時なれば良き牧地に放牧するがよい、又冬期舍飼の場合では柔軟美味の乾草を與へねばならぬ、若し乾草が粗硬であつたならば、穀類等を合せて與へねばならぬ、然らざれば仔羊の發育は著しく害せらるゝものである。

羊の肥育は滋養に富んだ飼料を與へ、肉質を改良し脂肪を聚積せしむるのが目的である、肥育法は牛の場合と畧々同様である、肥育に最適の飼料は羊か好んで食する滋養分に富み又消化し易き穀菽類の挽割又は製油や製粉等の残渣、例へば大豆粕や麩の類と良き乾草

とである、多汁しるおほきの飼料例かいらりょうたごへば醸造殘滓じょうぞうのこりかすの様やうなものは効能きゝゐが少すくない。

肥育ひいくの年とし齡せいは一歳半さいはんから三歳半迄さいはんまでが最ちつとも適當てきとうである。

繁殖はんしよくの適齡てきれいは種類しゆるいによつて一様やうでない、一般ほんに毛用種もうようしゆは晩熟おそてきて、肉用種にくようしゆは早熟はやてきであるが概がいして二歳さい乃至二歳半頃さいはんころである、肉用種にくようしゆは一歳半頃はんころから繁殖はんしよくせしめて宜よろしい繁殖はんしよくを終おはる年とし齡せいは牡をすでは満六歳まるさい牝めすでは満八歳まるさいである。

發情さかりは自然しぜんの状態ありさまでは秋あきの末頃すえころに起おこるもので、種付たねつけをしなければ二三週しゆうで反復くりかへしするものである、發情期間さかりきかんは二十四時間じつかん乃至三十六時間じつかんで、其兆候そのしるしは甚はなはだ微弱かくくで、分泌ぶんびつ等なごも少すくなく往々たまり／＼看過みすこしすることがある、發情さかりする時期じきになれば、牝羊めすの群むれに四五週間しうかん牡羊をすを放はなつて置をけば種付たねつけが出來でる、其割合そのわりあいは牝五めす、六十頭ちゆうに對たいし牡一頭をすで宜よろしい、牡をすは平

羊

五〇

常<sup>にはめす</sup>牝<sup>わか</sup>と別<sup>を</sup>ち置<sup>を</sup>かねばならぬ、種<sup>たねつけ</sup>付<sup>すん</sup>が濟<sup>すま</sup>だか濟<sup>すま</sup>ぬかを見る<sup>み</sup>には、初<sup>はじ</sup>め  
 牡<sup>をす</sup>を放<sup>はな</sup>つ時<sup>とき</sup>にその腹<sup>はら</sup>に「べにがら」の類<sup>るい</sup>を塗<sup>ぬ</sup>つて置<sup>を</sup>けば、種<sup>たね</sup>が付<sup>つ</sup>いた  
 牝<sup>めす</sup>の臀<sup>しり</sup>部に赤<sup>あか</sup>い色<sup>いろ</sup>が着<sup>つ</sup>くから直<sup>す</sup>ぐに判<sup>わか</sup>る。

分<sup>ぶん</sup>娩<sup>べん</sup>早<sup>はや</sup>見<sup>み</sup>表<sup>ひょう</sup>

種 <sup>種</sup> 付 <sup>付</sup> 日 <sup>日</sup> 次 <sup>次</sup>	分 <sup>分</sup> 娩 <sup>娩</sup> 月 <sup>月</sup> 日 <sup>日</sup>		種 <sup>種</sup> 付 <sup>付</sup> 日 <sup>日</sup> 次 <sup>次</sup>
	種 <sup>種</sup> 付 <sup>付</sup> 日 <sup>日</sup>	種 <sup>種</sup> 付 <sup>付</sup> 日 <sup>日</sup>	
一	元月三	元月三	一
二	元月四	元月四	二
三	元月五	元月五	三
四	元月六	元月六	四
五	元月七	元月七	五
六	元月八	元月八	六
七	元月九	元月九	七
八	元月十	元月十	八
九	元月十一	元月十一	九
十	元月十二	元月十二	十
十一	元月十三	元月十三	十一
十二	元月十四	元月十四	十二
十三	元月十五	元月十五	十三
十四	元月十六	元月十六	十四
十五	元月十七	元月十七	十五
十六	元月十八	元月十八	十六
十七	元月十九	元月十九	十七
十八	元月二十	元月二十	十八
十九	元月二十一	元月二十一	十九
二十	元月二十二	元月二十二	二十
二十一	元月二十三	元月二十三	二十一
二十二	元月二十四	元月二十四	二十二
二十三	元月二十五	元月二十五	二十三
二十四	元月二十六	元月二十六	二十四
二十五	元月二十七	元月二十七	二十五
二十六	元月二十八	元月二十八	二十六
二十七	元月二十九	元月二十九	二十七
二十八	元月三十	元月三十	二十八
二十九	元月三十一	元月三十一	二十九
三十	元月三十二	元月三十二	三十
三十一	元月三十三	元月三十三	三十一
三十二	元月三十四	元月三十四	三十二
三十三	元月三十五	元月三十五	三十三
三十四	元月三十六	元月三十六	三十四
三十五	元月三十七	元月三十七	三十五
三十六	元月三十八	元月三十八	三十六
三十七	元月三十九	元月三十九	三十七
三十八	元月四十	元月四十	三十八
三十九	元月四十一	元月四十一	三十九
四十	元月四十二	元月四十二	四十
四十一	元月四十三	元月四十三	四十一
四十二	元月四十四	元月四十四	四十二
四十三	元月四十五	元月四十五	四十三
四十四	元月四十六	元月四十六	四十四
四十五	元月四十七	元月四十七	四十五
四十六	元月四十八	元月四十八	四十六
四十七	元月四十九	元月四十九	四十七
四十八	元月五十	元月五十	四十八
四十九	元月五十一	元月五十一	四十九
五十	元月五十二	元月五十二	五十

種付日次	種付月日		五	六	七	八	九	十	十一	十二
	月	日	月	月	月	月	月	月	月	月
一	三	六	三	三	三	三	三	三	三	三
二	三	七	三	三	三	三	三	三	三	三
三	三	八	三	三	三	三	三	三	三	三
四	三	九	三	三	三	三	三	三	三	三
五	三	一〇	三	三	三	三	三	三	三	三
六	三	一一	三	三	三	三	三	三	三	三
七	三	一二	三	三	三	三	三	三	三	三
八	三	一三	三	三	三	三	三	三	三	三
九	三	一四	三	三	三	三	三	三	三	三
一〇	三	一五	三	三	三	三	三	三	三	三
一一	三	一六	三	三	三	三	三	三	三	三
一二	三	一七	三	三	三	三	三	三	三	三
一三	三	一八	三	三	三	三	三	三	三	三
一四	三	一九	三	三	三	三	三	三	三	三
一五	三	二〇	三	三	三	三	三	三	三	三
一六	三	二一	三	三	三	三	三	三	三	三
一七	三	二二	三	三	三	三	三	三	三	三
一八	三	二三	三	三	三	三	三	三	三	三
一九	三	二四	三	三	三	三	三	三	三	三
二〇	三	二五	三	三	三	三	三	三	三	三
二一	三	二六	三	三	三	三	三	三	三	三
二二	三	二七	三	三	三	三	三	三	三	三
二三	三	二八	三	三	三	三	三	三	三	三
二四	三	二九	三	三	三	三	三	三	三	三
二五	三	三〇	三	三	三	三	三	三	三	三
二六	三	三一	三	三	三	三	三	三	三	三
二七	三	三二	三	三	三	三	三	三	三	三
二八	三	三三	三	三	三	三	三	三	三	三
二九	三	三四	三	三	三	三	三	三	三	三
三〇	三	三五	三	三	三	三	三	三	三	三
三一	三	三六	三	三	三	三	三	三	三	三
三二	三	三七	三	三	三	三	三	三	三	三
三三	三	三八	三	三	三	三	三	三	三	三
三四	三	三九	三	三	三	三	三	三	三	三
三五	三	四〇	三	三	三	三	三	三	三	三
三六	三	四一	三	三	三	三	三	三	三	三
三七	三	四二	三	三	三	三	三	三	三	三
三八	三	四三	三	三	三	三	三	三	三	三
三九	三	四四	三	三	三	三	三	三	三	三
四〇	三	四五	三	三	三	三	三	三	三	三
四一	三	四六	三	三	三	三	三	三	三	三
四二	三	四七	三	三	三	三	三	三	三	三
四三	三	四八	三	三	三	三	三	三	三	三
四四	三	四九	三	三	三	三	三	三	三	三
四五	三	五〇	三	三	三	三	三	三	三	三

羊



妊娠期は五箇月(平均百四十九日)である。妊羊の分娩期が近づいたならば群より離し、三尺に四尺位の室に容れて分娩せしむるがよい。分娩が終れば仔羊には鹽か皴の様なものを體に撒りかけて置けば母羊は一層丁寧に舐めるから皮膚の乾きが早い、母羊の乳房が毛に深く被はれるときは仔羊の乳を飲むに都合のよい様に毛を短く剪り取つてやらねばならぬ、四五日立つて、母仔共に元氣付いたら、群と一緒に放牧しても差支ないけれども、若し仔羊が弱いときは、少し永く羊舎に入容て置かねばならぬ。

生後一二箇月になれば尾は尾根から約一寸程の處で鋭き小刀か又は大きな鋏等で切斷するものである、又種用にしない牡仔羊は同じく此時期に去勢せねばならぬ、去勢は甚だ簡單で陰囊を切りて睪丸を

押し出し、精系を挫切し抜き取るのである、切口は自然に任せて置いて  
も治るけれども「タール」を塗れば一層治りが早い。繁殖用の羊は六  
箇月位になれば牝牡を別けて飼養するがよい、羊は一歳半位迄は成  
長が速かで體の變化も起り易いからそれまでは營養分に富んだ消化  
の易いものを與へるが良い、此年齢を過ぎれば成長した羊と同様に  
取扱つて宜しい。

剪毛は春の終り夏の初め年に一回が普通であるが、時には春の四、  
五月と秋の九月との兩度にする所もある、春毛は秋毛より分量が多  
い、二度剪の方は一度剪に較ぶれば毛が短かいから長い毛の種類に  
限るが可い。

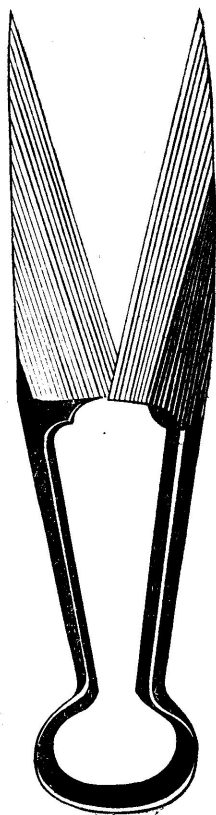
羊の毛を剪る時は天氣が三、四日續く見込があるときでなくてはな

らぬ、毛を剪る前には羊の體を洗ふので、天氣が悪しければ乾きがわるく、折角洗つた毛も塵埃に塗みれたり又羊の健康をも害するものである。

羊を洗ふ水は河か池の水がよい、井戸の水は避けねばならぬ、羊の毛に着いて居る多くの脂肪が井水で洗へば少なくなつて毛が脆くなり折れ易くなるからである。

羊を洗ふには池底や河床に小石が澤山あつてそれに綺麗な水のある處がよい、羊をその中に背の當りまで追込んで手で毛を洗ふか或は河か池の水中を三、四回往來せしむればよい、河や池のない處では桶に水を入れて置いて少しづつ、流し出して洗はねばならぬ、洗つた羊は塵の少ない日蔭の所に置くが可い、直に太陽の光線に當れば

早く乾く代りに毛が脆くなるからよくない、可成徐々に乾燥せしむる方がよい、大概表面の毛が乾いたら新鮮な乾草か藁かを充分に入れた小屋に移せば天氣の良い時であれば二日位で乾く、然し若し天氣が悪い時には五日位もかゝる乾燥の度を見るには毛の中に手を入れて見れば判る、則ち少しの冷氣をも感せぬ様なれば充分乾いたのである、若し少しでも濕りがあれば冷氣を感ずるものである。充分乾燥したならば塵の少ない小屋の中に綺麗な吳蘆か「ツツク」様なものを敷き毛の汚れぬ様にしてその上に羊を導き、仰けにして腹の中央から剪り初め、漸次背部に移るのである、毛は毛皮を剥いだ様に全部續け置き、一枚にして巻くがよい、毛は各々重量を秤り賣り出す迄は乾燥した風通しの良い場所に貯へ置くのである。



毛を剪るには圖にある様な大きな鋏を用ゆるのである。

毛を剪るときに羊の皮膚を傷けたならば「タール」を塗るが可い。

羊は夏季は晝夜全く放牧して差支がないけれども、害敵其他天候の

關係上夜間のみ羊舎に收容する方が安全である冬期は時間を限り

て放牧するか、若くは羊舎に附屬する運動場に出すか、或は舍飼

するかである。

羊舎を建てる位置は乾燥した場所、南か南東に傾斜した處が最も良い、建物は隙間なく暖かで且つ換氣の裝置が甚だ必要である、床は板張か土間であるが、土間なれば地面から一、二尺高く土を盛り上げて充分に乾燥せしめねばならぬ、廣さは二、三頭に對し一坪位の割合で、別に妊羊を容るゝ室と草架と食鹽入と給水器がなくてはならぬ、敷藁は多量に入るゝがよい、特に冬季に於ては防寒の爲め入用である。

羊に起り易い重なる疾病は次の通りである。

急性鼓腸

此病は多くは乾草から青草に移る場合に起るもので、

胃中の食物が醗酵して多量の瓦斯を生じ、腹部殊に左腹側が急に膨大して、食慾も反芻も止み呼吸が苦しくなるものである。

此病が起つたならば、手か藁束で強く左腹側を按摩し又冷水を注いで、前身を高くするがよい、又石灰水の一合内外を十四、五分毎に二、三回飲ましむれば効能がある、若しも多数の羊が此病に罹つたときは大に運動せしめ、河か池に誘ひ入るがよい。

### 回旋症

此病は脳に蟲が寄生するので、多くは幼い羊に起る

これは大に寄生する縋蟲から傳播するのである、羊は前後の四肢を軸として回旋し或は頭を傾け或は仰き、時としては物に衝着するところがある、病羊は漸次衰弱するのである、それで平常犬の縋蟲を驅除して豫防することが肝要である、若しこの病に罹つたならば速に撲殺するが得策である。

### 寄生性胃病

此の病は第四胃の中に圓蟲が寄生して起る、多くは

幼い羊がこれに罹るのである、病羊は痴鈍となつて甚しく痩せ衰へ、腹部が膨大し四肢等に水腫を發し、糞便が黒くて流動する様になると、大概死ぬるものである。

病羊には「カマラ」の八乃至十五瓦（仔羊には二乃至八瓦）か又は「ベンチン」の三十乃至四十瓦（仔羊は四乃至十瓦）を二、三日連用すれば効能がある、尙ほ良き飼料を與へ卑濕の牧地を避けしむるがよい病羊の糞便は焼却するか若くは深く埋没すべきである。

繚蟲症 此病は腸内に繚蟲の寄生するのである、病羊の毛は光澤を失ひ貪食するにも係らず漸次痩せ衰へ、牧地では常に群後に落ち、糞中蟲の片節を見ることがある。

病羊には「カマラ」の四瓦を與ふれば一晝夜位で糞と共に排出するも



のである。

腐蹄病

蹄匣が腐敗して漸次深部に入りて跛行するに至るもので

ある、患部は角質が軟

化して、灰白色の汚汁を漏し悪臭がある。

腐敗せる角質を削除し毎日石炭酸水(二%)で消毒し、又此液に浸し

た「ガーゼ」を創孔に填充して繻帯せねばならぬ。

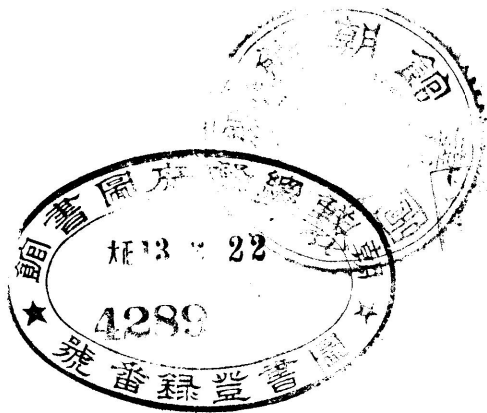
疥癬

此病に罹れば皮膚に淡黄色の結節が生じ、水疱、膿疱を發

して皮膚が肥厚し痒さを覺え之を搔くので毛が脱ける。

薬は「クレオリン」百、白露拔兒散百、酒精四百の割合に混合した

ものを一日一回患部へ塗れば効能がある。



大正二年十月

朝

# 牧牛指南

附豚、鷄、羊

朝鮮總督府